

**大田区子どもの生活実態に関するアンケート調査
詳細分析結果報告書**

平成 30 年2月

大田区福祉部福祉管理課

目 次

1. 分析の視点・報告書の構成	1
(1) 目的・分析データの概要.....	1
(2) 分析の枠組み・視点.....	2
(3) 本報告書の構成、結果の表示方法等.....	3
(4) 詳細分析から把握された現状・課題.....	4
2. 生活困難層に関する詳細分析	8
(1) 生活困難の分類と属性等の関係.....	8
(2) 生活困難の構成要素と属性等の関係.....	9
3. 保護者の生活面での課題に関する詳細分析	12
(1) 保護者の健康状態・生活習慣.....	12
(2) 人間関係・暮らし向きの状況.....	14
(3) 子どもとの関わり.....	17
4. 子どもの生活習慣・健康面での課題に関する詳細分析	18
5. 子どもの学校生活・学習面での課題に関する詳細分析	21
(1) 友だちとの関係性・学校生活.....	21
(2) 先生との関係性.....	25
(3) 学習の状況（学校の授業の理解度）.....	28
6. 子どもの心理的安定・居場所の面での課題に関する詳細分析	29
(1) 自己肯定感・不登校傾向.....	29
(2) 居場所に対するニーズ.....	31
7. 連鎖の状況に関する詳細分析	34
(1) 子どもへの進学期待.....	34
(2) 人間関係・自己肯定感.....	37
8. ひとり親世帯の状況に関する詳細分析	39
(1) 末子の年齢・教育段階別の就業の状況・支援ニーズ.....	39
(2) 末子の年齢・教育段階別の悩みごと・生活課題.....	41
(3) ひとり親世帯の情報入手経路.....	43

1. 分析の視点・報告書の構成

(1) 目的・分析データの概要

大田区では、区に在住する子どもたちの経済的困窮に起因する生活困難を網羅的に把握し、子どもの貧困対策に関する計画策定及び今後の施策の立案・評価に資する基礎的データを集計することを目的として、平成 28 年度に「子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」を実施した。

これらの調査については、「大田区子どもの生活実態に関するアンケート調査報告書」（平成 29 年 3 月）において集計結果を報告し、特に「生活困難層」と「非生活困難層」との間で、生活状況等に関し様々な差が生じていることが把握されたところである。

このたびは、あらためて「子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」のデータをもとに、区内における効果的な施策展開のための基礎資料とすることを目的として、詳細分析を実施した。

図表 1-1 分析データの概要

子どもの生活 実態調査	保護者票	実施時期	平成 28 年 6 月 23 日～7 月 7 日
		調査対象	区立小学校のすべての小学 5 年生の保護者 (児童 1 名につき 1 票)
		調査項目	家庭の経済状況や就労の状況、子どもとの関わり の状況 など
		有効回答数(回答率)	3,325 件 (73.2%)
	子ども票	実施時期	平成 28 年 6 月 23 日～7 月 7 日
		調査対象	区立小学校のすべての小学 5 年生 (4,544 名)
		調査項目	学習の状況や放課後の過ごし方など生活の様子、 健康状態 など
		有効回答数(回答率)	3,447 件 (75.9%)
ひとり親家庭の生活実態 に関する調査	実施時期	平成 28 年 7 月 29 日～8 月 16 日	
	調査対象	平成 28 年度の児童育成手当受給世帯のうち、 無作為に抽出した 2,000 世帯	
	調査項目	家庭の経済状況や就労の状況、公的支援の利用 状況、支援ニーズ など	
	有効回答数(回答率)	830 件 (41.5%)	

(2) 分析の枠組み・視点

①「子どもの生活実態調査」の詳細分析

「大田区子どもの生活実態に関するアンケート調査報告書」（平成 29 年 3 月）では、「子どもの生活実態調査」の「保護者票」「子ども票」のそれぞれについて、主に「生活困難層」に該当するか否かの別（生活困難の分類方法等については後述）に集計を行った。これは、経済的に困難な状況等が様々な生活場面にどのような影響を及ぼすのか、どのような点で差異が見られ、あるいは見られないのかということの全体状況を把握するために実施したものである。

これに対し、本報告書では、主に以下の 4 つの視点に基づき詳細分析を行った。

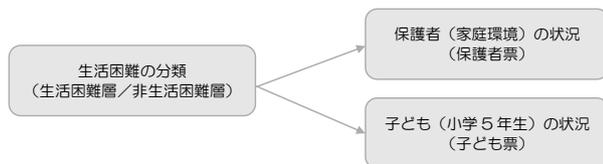
視点①として、おおた 子どもの生活応援プラン及び生活困難層の定義に示される事項について把握を試みた。また、視点②は、保護者の状況に着目し、「生活面での課題がより大きい保護者はどのような人たちか」について、生活困難の分類別の集計以外に、属性別の集計等を行うことで検討を行った。同様に、視点③は子どもの状況に着目し、「(各方面で) 課題がより大きいのはどのような子どもたちか」について、生活困難の分類別以外の点についても集計を行い、検討を行った。

視点④としては、本報告書で検討する視点①～③のいずれにも関わるものとして、保護者世代から子ども世代に困難な状況が引き継がれてしまっている状況（「連鎖」）について把握した。

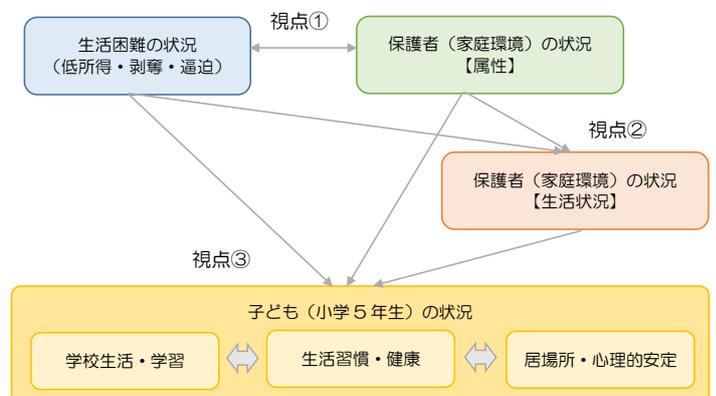
- ※**視点①**：「生活困難」の各要素に着目しながら、保護者の属性との関係性を把握。生活困難層とはどのような人たちかに関する分析。
- ※**視点②**：「生活困難（各要素）」と「保護者の属性」の両面から、保護者の生活状況との関係性を把握。生活面での課題がより大きい保護者はどのような人たちかに関する分析。
- ※**視点③**：子どもについて「学校生活・学習」「生活習慣・健康」「心理的安定・居場所」の 3 つの視点から、生活困難の分類に加え、保護者の生活状況等との関係性を把握。（各方面で）課題がより大きいのはどのような子どもたちかに関する分析。
- ※**視点④**：視点②～④の全体に関連する、貧困の連鎖の状況に関する分析。

図表 1-2 分析枠組みの概要

【「大田区子どもの生活実態に関するアンケート調査報告書」における分析枠組み】



【本報告書における分析枠組み】



②「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」の詳細分析

「大田区子どもの生活実態に関するアンケート調査報告書」（平成 29 年 3 月）では、「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」について、回答者全体の集計結果を掲載し、調査対象としたひとり親世帯全体としての生活状況やニーズの把握等を行っている。

これに対し、本報告書では、子ども（末子）の年齢・教育段階別の集計や、保護者の属性等別の集計を行うことで、どのような世帯においてどのようなニーズが特に高いのかということ把握することを試みた。

（3）本報告書の構成

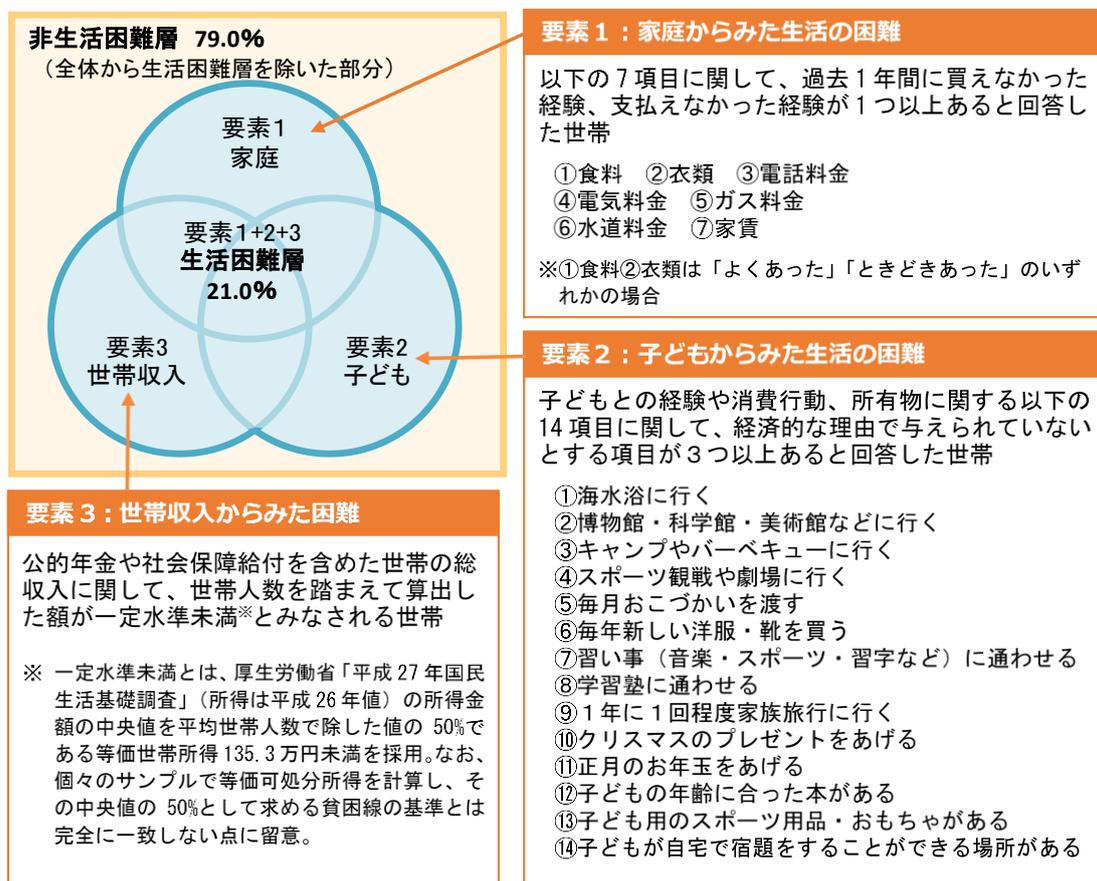
①本報告書の構成

本報告書は本章第 1 章を含む、全 8 章で構成している。第 2 章が上述の「子どもの生活実態調査」に関する視点①に、第 3 章が視点②に、第 4 章～第 6 章が視点③に、第 7 章が視点④に対応している。第 8 章は「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」の詳細分析の結果を掲載した。

②用語や概念の定義・分類等

本報告書では、「大田区子どもの生活実態に関するアンケート調査報告書」（平成 29 年 3 月）を踏襲し、生活困難の分類別の集計を行っている。分類の基準となっているのは以下の 3 つの要素であり、これら「家庭からみた生活の困難」「子どもからみた生活の困難」「世帯収入からみた困難」のうち、いずれか 1 つ以上に該当する場合を「生活困難層」、いずれの要素にも該当しない場合を「非生活困難層」としている。

図表 1-3 「生活困難層」の定義のイメージ図



また、本報告書では、一部の分析において、これら生活困難層に関する3つの要素の組み合わせをより細かく分類して集計を行った。その際の基準は、以下のようになっている。

まず、「生活困難層」を「周辺層」と「困窮層」の2つに分類した集計をおこなっている。「周辺層」は、生活困難の3要素のうちいずれか1つのみ（「低所得のみ」「家計の逼迫のみ」「子どもの剥奪のみ」¹⁾）に該当する場合であり、「困窮層」は3要素のうち2つ以上該当する場合である。「困窮層」のほうがより生活状況は厳しいのではないかと考えられ、生活困難層の中での差異を把握することを意図してこの分類により集計を行った。

さらに、「周辺層」を、該当する要素の別に3つに分類し、「困窮層」は要素の組み合わせにより分類した集計を行った。

図表 1-4 「生活困難層」の再分類の対応表

「生活困難層」 (3つの要素のうち いずれか1つ以上 に該当)	「周辺層」 (3つの要素のうち いずれか1つのみ該当)	「低所得のみ」 (「世帯収入からみた困難」のみに該当)
		「家計の逼迫のみ」 (「家庭からみた生活の困難」のみに該当)
		「子どもの剥奪のみ」 (「子どもからみた生活の困難」のみに該当)
	「困窮層」	3つの要素のうち2つ以上に該当

(4) 詳細分析から把握された現状・課題

①<<保護者>>健康状態・生活習慣

保護者の健康状態は、困窮層において特によくない割合が高い（図表 3-1-1）。

朝食の摂取状況についても、困窮層では毎日食べるわけではない割合が特に高くなっている（図表 3-1-2）。

また、朝食を毎日食べるわけではない割合は、非生活困難層・生活困難層ともに健康状態のよくない保護者で高く（図表 3-1-3）、健康状態が影響して規則正しい生活を送ることができないという保護者が一定程度いるのではないかと考えられる。

②<<保護者>>人間関係・暮らし向きの状況

困ったときや悩みがあるときに相談できる相手について、「いない」との割合は、特に困窮層で高く（図表 3-2-1）、健康状態がよくない場合ほど高い（図表 3-2-3）。他方、祖父母との同居の有無によっては統計的に有意な差が見られず（図表 3-2-2）、保護者の「孤立」の状況は、単に身近なところに人がいるか否かということでは判断できないことがうかがえる。

相談相手の有無は暮らし向きに対する認識とも関連性があり（図表 3-2-6）、健康状態がよくないこと（図表 3-2-5）とあわせて、相談相手がいないことは「生活が苦しい」という認識をより高める要因のひとつとなっていることがうかがえる。

③<<保護者>>子どもとの関わり

「勉強をみる」という子どもとの関わりに関して、暮らし向き全般に余裕がないこと（図表 3-3-2）が関連していることがうかがえ、生活の中での保護者の精神的な安定・安心を担保することが、子ど

¹⁾ 本報告書では、「家庭からみた生活の困難」に該当する場合を「家計の逼迫」、「子どもからみた生活の困難」を「子どもの剥奪」、「世帯収入からみた困難」を「低所得」として表現している。

もの学習環境を整えるという観点からも重要であることが見て取れる。

④<<子ども>>生活習慣・健康状態

生活習慣の乱れを反映すると考えられる朝食欠食の状況については、子どもの健康状態も影響を及ぼす要因のひとつであると考えられる（図表 4-1-1～4）が、そのことよりも、保護者の朝食摂取状況が影響する度合いが大きい（図表 4-1-5）ことがうかがえる。

また、虫歯の状況に着目すると、虫歯は子ども本人の朝食の摂取状況との関連性が大きいことが見て取れる（図表 4-1-7）。

さらに、生活習慣の乱れは、子どもの健康状態（子ども自身の健康観）に対しても影響を及ぼすと考えられる。虫歯があることとあわせて（図表 4-1-8）、特に朝食欠食の状況と健康状態の認識との関連性の度合いが大きいことが見て取れる（図表 4-1-4）。

⑤<<子ども>>友だちとの関係性・学校生活

友だちとの会話の状況や友だちに会うことを楽しみと思うか否かについては生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られず（図表 5-1-1、図表 5-1-2）、友だちとのコミュニケーションに関する格差は生じていないように見える。勉強を教えてもらう相手として「友だち」と回答したのは困窮層において特に高く（図表 5-1-3）、むしろ友だちとの関係は密であるようにもうかがえる。

しかし、「友だちに好かれていると思う」という感覚には生活困難の分類別に統計的に有意な差があり、困窮層の子どもほど肯定的な回答割合は低い（図表 5-1-4）。また、非生活困難層・生活困難層ともに、健康状態があまりよくないと考えている場合には、友だちから好かれているとは思わないと回答する傾向がある（図表 5-1-5）。

学校での休み時間を楽しみと思うか否かについても生活困難の分類別に統計的に有意な差が見られ、困窮層の子どもほど休み時間を「楽しみ」と回答する割合は低い（図表 5-1-6）。また、友だちとあまり話さない場合や好かれているとは思わない子どもほど休み時間を「楽しみ」と回答する割合も低い（図表 5-1-8）。休み時間を楽しみと思うか否かには健康に対する認識がよくないことも関係している。（図表 5-1-7）

⑥<<子ども>>先生との関係性

友だちとのコミュニケーションの状況と同様に、学校の先生との会話の状況や学校の先生に会うことを楽しみと思うか否かについては生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られない（図表 5-2-1、図表 5-2-2）。これらのことから、学校という場で学校の先生は子どもの生活困難の状況によらず、わけ隔てなく接している状況にあることがうかがえる。

また、勉強を教えてもらう相手として学校の先生を挙げた割合は困窮層で特に高くなっている（図表 5-2-3）。

「授業が楽しみ」と思う度合いには生活困難の分類別に差異があり（図表 5-2-4）、その背景として保護者が家庭で勉強に関わる度合いが影響していることがうかがえる（図表 5-2-5）。

そのようななかで、学校の先生と比較的よく話すと回答した子どもや、勉強を学校の先生に教えてもらうと回答した子どもでは、学校の授業が楽しみであると回答した割合が高くなっている（図表 5-2-6、図表 5-2-7）。先生との関係が深まっていくことが授業を「楽しみだ」と思う意識の高まりとも関連していることがうかがえる。

⑦<<子ども>>学習の状況

授業の理解度は生活困難の分類別に差異が見られる（図表 5-3-1）。

差異が生じる要因のひとつとして、保護者が家庭でどの程度勉強に関わっているか否かということが挙げられ（図表 5-3-2）、家庭での生活状況が子どもの授業の理解度にも及んでいることが示唆される。

⑧<<子ども>>自己肯定感・不登校傾向

自己肯定感（自分は価値がある人間だと思うか否か）や不登校傾向（学校に行きたくないと思うか否か）については、生活困難の分類別に統計的に有意な差が見られる（図表 6-1-1、図表 6-1-3）。

「授業がわかる」ということが、子どもにとって非常に重要なことであることが確認できる（図表 6-1-2、図表 6-1-4）。仮に非生活困難層であっても、授業がわからない場合には自己肯定感が低く、不登校傾向が高くなっている。逆に生活困難層であっても、授業がわかる子どもは自信を持って学校生活を送ることができている様子が見える。

⑨<<子ども>>居場所に関するニーズ

「こども食堂」に相当すると考えられる、「夕ご飯をみんなで食べることができる場所」に対する子どもからのニーズは、必ずしも困窮層において最も高いというわけではない（図表 6-2-1）。

「学習支援」に相当すると考えられる、「大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所」についても、生活困難層だからニーズが高いというわけではない（図表 6-2-2）。また、必ずしも授業の理解度が低い子どもでニーズが高いわけでもなく（図表 6-2-4）、授業の理解度との関係性は「U字型」になっている。

関連して、友だちに好かれていると思うか否かとの関係性において、生活困難層では好かれていないと思う場合に「大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所」に対するニーズが低くなっている（図表 6-2-3）点も特徴的である。

「(学校以外で) なんでも相談できる場所」に対するニーズは困窮層で特に高く（図表 6-2-5）、また、非生活困難層・生活困難層ともに、不登校傾向が高い子どもでニーズが高くなっている（図表 6-2-6）。様々な面で課題を抱えている子どもが、総合的な相談の場を求めているのではないかと考えられる。

⑩<<保護者>>子どもへの進学期待

保護者が最後に通った学校（≒学歴）と生活困難の状況とは関連があることが確認でき（図表 7-1-1、図表 7-1-2）、相対的に高い学歴を得ることはその後貧困に陥るリスクを軽減する要因のひとつであると考えられる。

保護者が最後に通った学校の違いによって、子どもへの進学期待には差異があるが、（図表 7-1-3、図表 7-1-4）、この学歴の連鎖が生じる可能性は、非生活困難層であっても見られる（図表 7-1-5、図表 7-1-6）。

⑪<<保護者>>人間関係・自己肯定感

保護者に相談相手がいない世帯の子どもは、友だちとあまり話さない傾向がある（図表 7-2-1）。この傾向は非生活困難層・生活困難層ともに見られるものであるが（図表 7-2-2）、保護者の普段の生活のなかでの「社交性」「コミュニケーション能力」「疎外感」といったものが、子どもにも影響している。

る可能性がある。また、自己肯定感が低い保護者の子どもは自己肯定感が低い傾向が見られる（図表 7-2-3、図表 7-2-4）

⑫<<ひとり親>>末子の年齢・教育段階別の就業状況・支援ニーズ

児童育成手当を受給しているひとり親世帯で、特に末子が就学前の段階にある場合には2割以上が仕事をしておらず（図表 8-1-1）、仕事をしている場合であっても1週間あたりの労働時間は比較的短くなっている（図表 8-1-2）。また、仕事をしていない（十分にできない）背景として保育の手だての問題が一定程度あると考えられ（図表 8-1-3）、就労の支援とあわせて子育ての支援が必要であることが確認される。

他方、末子の年齢・教育段階が比較的高い場合には複数の仕事をしている人の割合が比較的高く（図表 8-1-1）、また、仕事をしていない理由としては自身の健康の問題（図表 8-1-4）のほか、条件に合う仕事を探していることが挙げられている（図表 8-1-5）。

⑬<<ひとり親>>末子の年齢・教育段階別の悩みごと・生活課題

収入が少ないことは末子の年齢・教育段階によって統計的に有意な差はなく（図表 8-2-1）、大半の世帯で課題になっていることがうかがえるが、支出の面に関しては、小学生・中学生段階の子どもがいる場合には塾や習い事の費用が十分に払えないことが課題となっている（図表 8-2-2）。

また、中学生および中学卒業段階の子どもがいる場合には子どもの進学が悩みごとのひとつとして挙げられる割合が高く（図表 8-2-3）、現在の暮らし向きに対する認識の回答からは、生活全体の「苦しさ」は末子の年齢・教育段階が高いほど強まっていることがうかがえる（図表 8-2-4）。

⑭<<ひとり親>>情報入手経路

子育てや暮らしに関する情報の入手方法について、「インターネット」との回答は年齢層によらず5割以上となっており（図表 8-3-3）、情報を得る方法として一般的なもののひとつであることがうかがえる。また、子育てや暮らしに関する情報の入手方法について年齢が比較的高い場合には「区報」との回答割合が（図表 8-3-2）、年齢が比較的低い場合には「SNS」との回答割合が高い傾向が見られ（図表 8-3-4）、世代によってよく参照される媒体・ツールが異なっていることもうかがえる。

集計結果の表示方法

本報告書に掲載した集計結果の表示に関して、以下の点には留意されたい。

- 集計の基礎となるべき度数は図表中に「n=〇〇」と表記している。
- 属性等別の集計を行うにあたり、無効回答（無回答など）であったものは集計の対象外としている。
- 集計は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、数値の合計が100.0%にならない場合がある。
- 回答の比率（%）は、その質問の回答者数を基礎として算出しているため、複数回答の設問はすべての比率を合計すると、100.0%を超える場合がある。
- 生活困難層／非生活困難層を定義するための要素として使用した設問への回答数（2,562件）と、全体の有効回答数（保護者票3,325件、子ども票3,447件）は異なるため、例えば、図表中のn値について、「生活困難層＋非生活困難層＝全体数」とはならない。
- 掲載した集計表については、原則として χ^2 検定にて2つ以上の属性の間に回答の差があるのかを検定した。その結果、1%水準で統計的に有意な差があるものには「***」、5%水準で有意な差があるものには「**」、10%水準で有意な差があるものは「*」、有意な差がないものは「X」を付記した。

2. 生活困難層に関する詳細分析

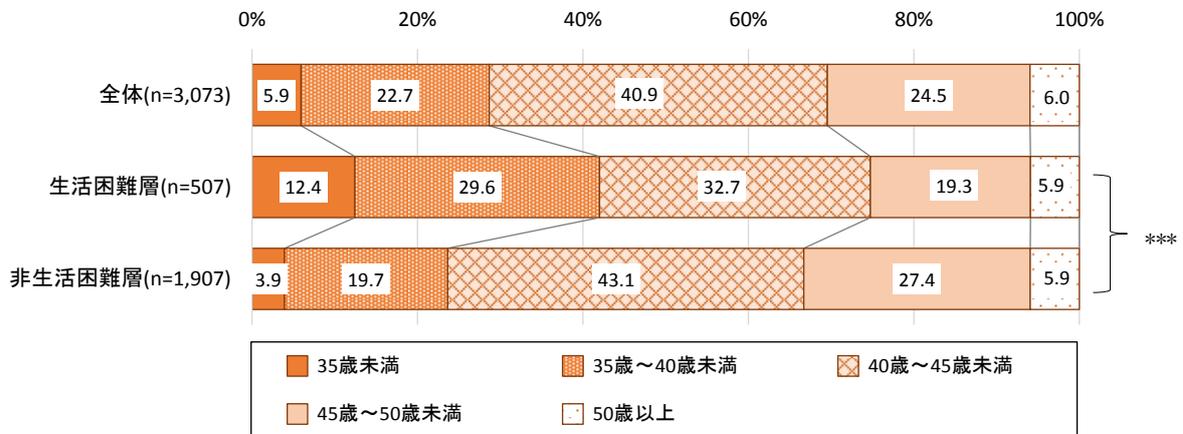
(1) 生活困難の分類と属性等の関係

①生活困難の分類と保護者（父親・母親）の年齢

保護者（父親・母親）²の年齢について、「35歳未満」の割合は、全体では5.9%、生活困難層では12.4%、非生活困難層では3.9%であった。

なお、40歳未満の割合は、全体では28.6%、生活困難層では42.0%、非生活困難層では23.6%であった。

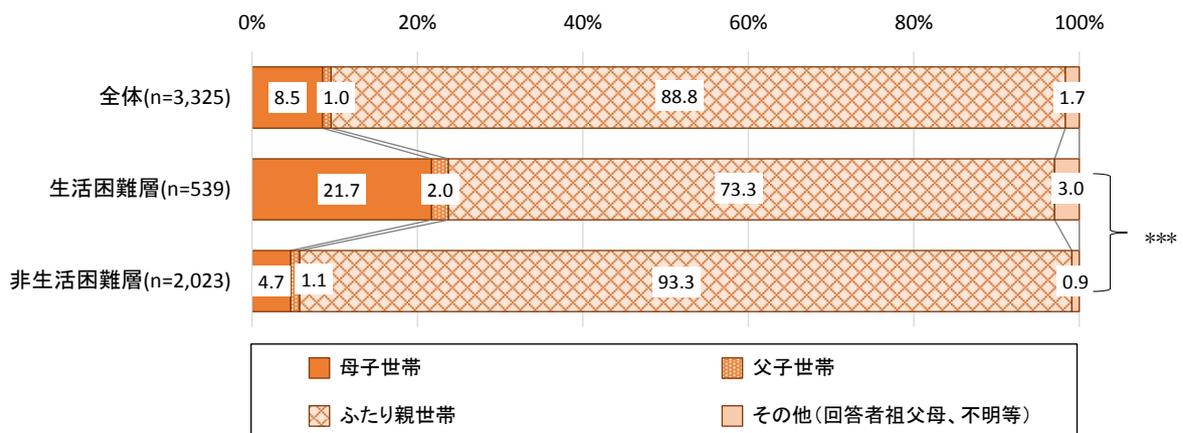
図表 2-1-1 生活困難の分類と保護者（父親・母親）の年齢



②生活困難の分類とひとり親世帯であるか否か

ひとり親世帯であるか否かについて、「母子世帯」に該当するのは、全体では8.5%、生活困難層では21.7%、非生活困難層では4.7%であった。

図表 2-1-2 生活困難の分類とひとり親世帯であるか否か



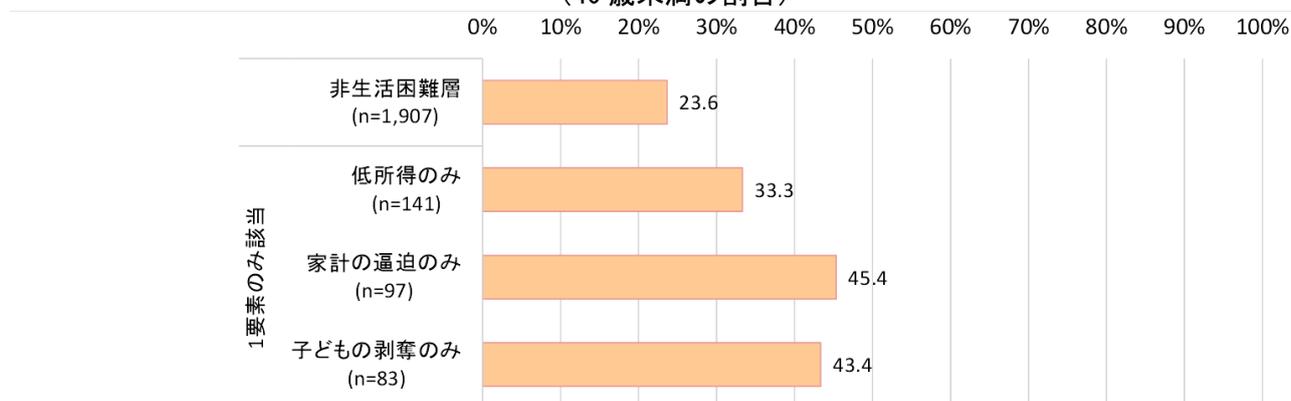
² 回答者が「父親」または「母親」の場合のみを集計対象とした。

(2) 生活困難の構成要素と属性等の関係

①生活困難の3要素と保護者（父親・母親）の年齢

保護者（父親・母親）³の年齢について、40歳未満の割合は、「低所得のみ」に該当する世帯では33.3%、「家計の逼迫のみ」に該当する世帯では45.4%、「子どもの剥奪のみ」に該当する世帯では43.4%であった⁴。

図表 2-2-1 生活困難の3要素と保護者（父親・母親）の年齢
(40歳未満の割合)



³ 回答者が「父親」または「母親」の場合のみを集計対象とした。

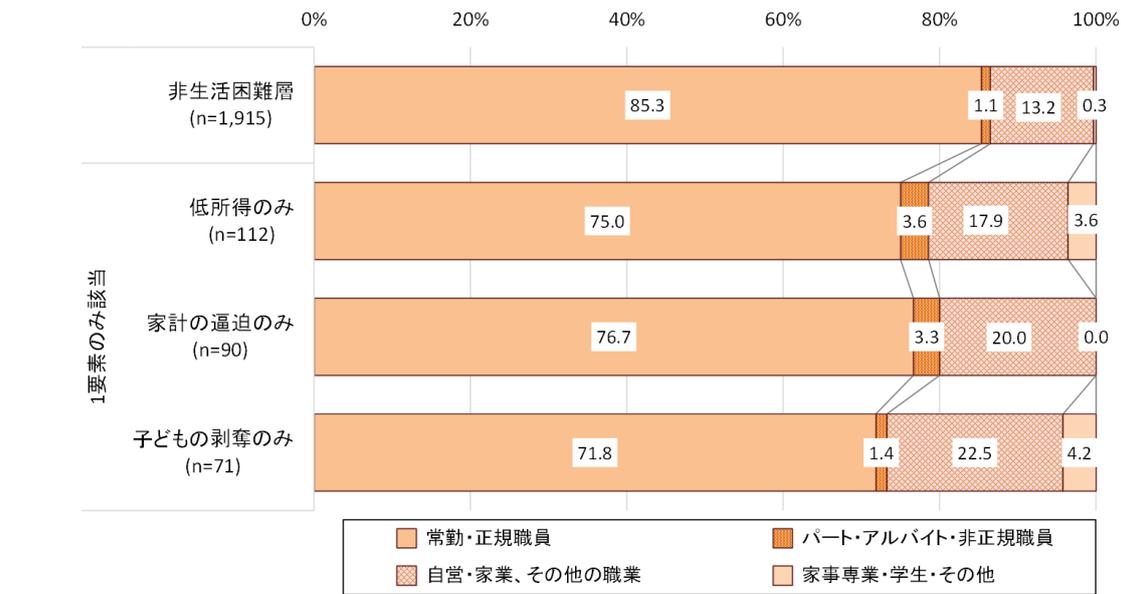
⁴ 生活困難の3要素についてより詳細に把握するにあたり、集計対象度数が比較的少ないことも考慮し、ここでは細かな分類による検定の結果によらず、集計の結果得られた結果を参照している。

②生活困難の3要素と父親・母親の就業状況

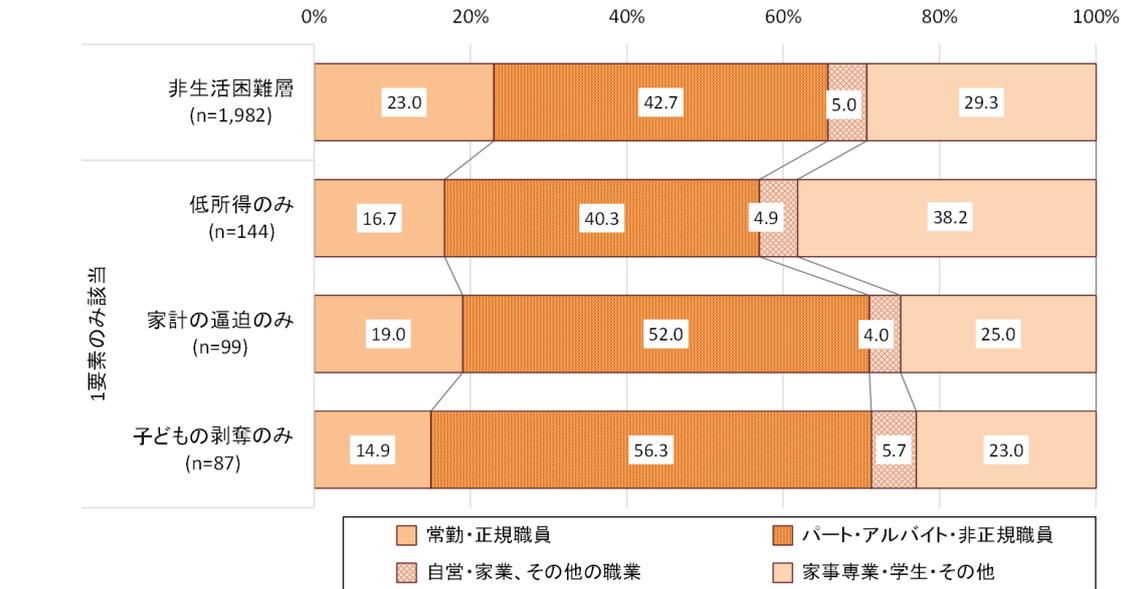
父親の現在の職業に関して、「常勤・正規職員」との回答は、「低所得のみ」に該当する世帯では75.0%、「家計の逼迫のみ」に該当する世帯では76.7%、「子どもの剥奪のみ」に該当する世帯では71.8%であった⁵。

また、母親の現在の職業に関して、「家事専業・学生・その他」との回答は、「低所得のみ」に該当する世帯では38.2%、「家計の逼迫のみ」に該当する世帯では25.0%、「子どもの剥奪のみ」に該当する世帯では23.0%であった。

図表 2-2-2 生活困難の3要素と父親の就業状況



図表 2-2-3 生活困難の3要素と母親の就業状況



⁵ 父親の就業状況については、①回答者の子どもからみた関係が「父親」、②回答者の子どもからみた関係が「母親」であり婚姻状況で「結婚している」と回答、③同居している家族として「父親」と回答している場合を集計対象とした。同様に、母親の就業状況については、①回答者の子どもからみた関係が「母親」、②回答者の子どもからみた関係が「父親」であり婚姻状況で「結婚している」と回答、③同居している家族として「母親」と回答している場合を集計対象とした。例えば、母子世帯であった場合に、父親の職業に関する集計の対象外になっている点には留意が必要である。

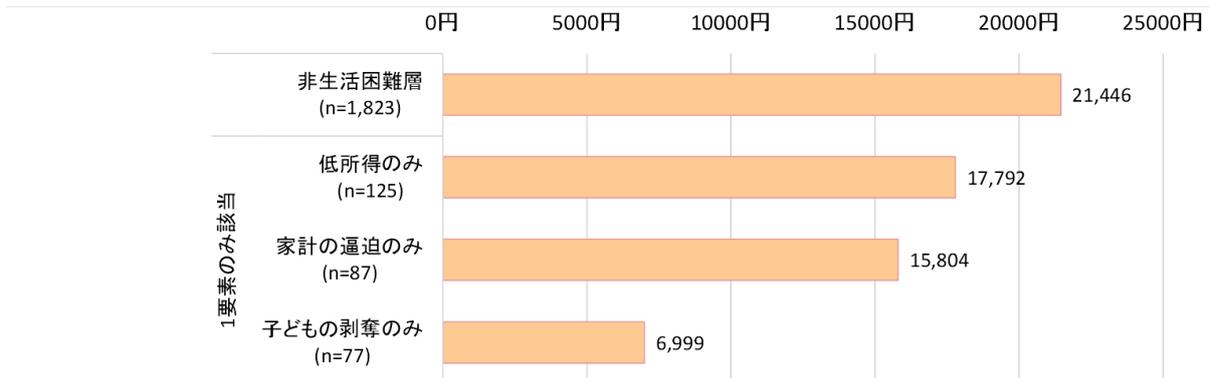
③生活困難の3要素と子どもにかかる生活費や学費

「塾など、学校外でかかる教育費」の支出額の平均値は、「低所得のみ」に該当する世帯では17,792円、「家計の逼迫のみ」に該当する世帯では15,804円、「子どもの剥奪のみ」に該当する世帯では6,999円であった。

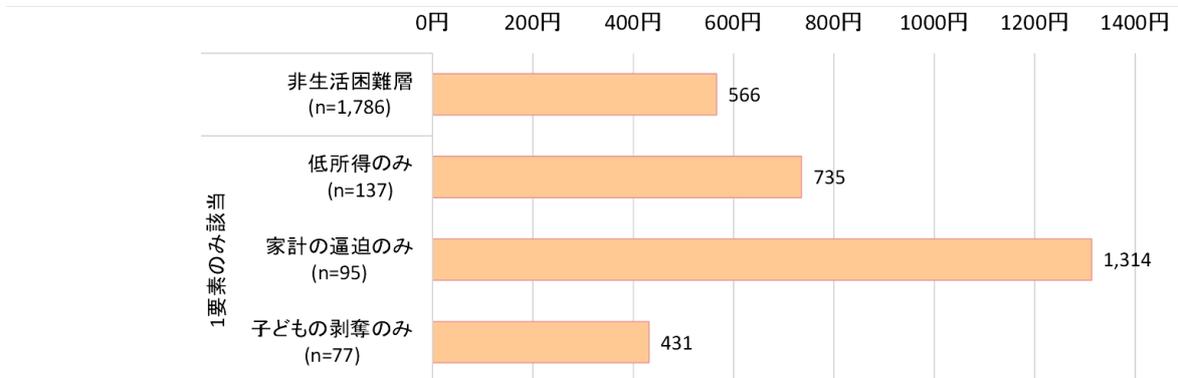
「おこづかい」の支出額の平均値は、「低所得のみ」に該当する世帯では735円、「家計の逼迫のみ」に該当する世帯では1,314円、「子どもの剥奪のみ」に該当する世帯では431円であった。

「携帯・スマートフォンの代金⁶」の支出額の平均値は、「低所得のみ」に該当する世帯では1,723円、「家計の逼迫のみ」に該当する世帯では2,280円、「子どもの剥奪のみ」に該当する世帯では1,156円であった。

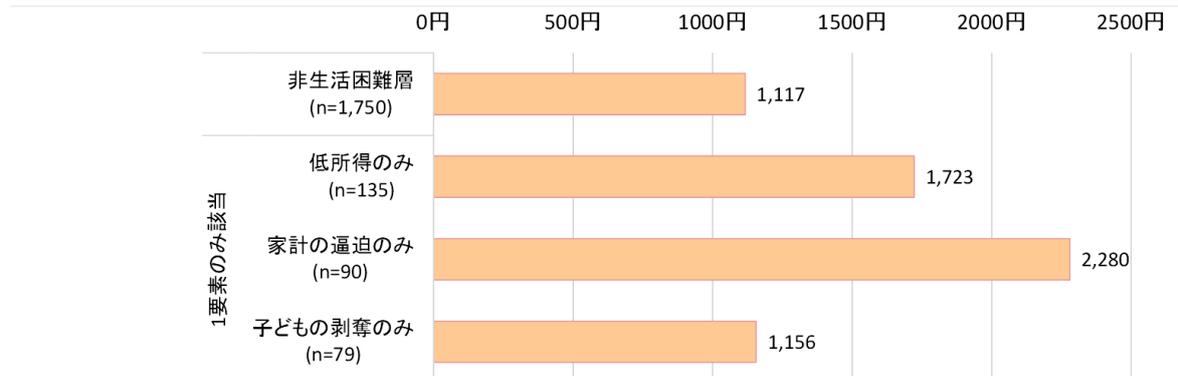
図表 2-2-4 生活困難の3要素と塾など、学校外でかかる教育費



図表 2-2-5 生活困難の3要素とおこづかい



図表 2-2-6 生活困難の3要素と携帯・スマートフォンの代金



⁶ 調査対象の子どもの携帯・スマートフォンの代金を尋ねた設問である。

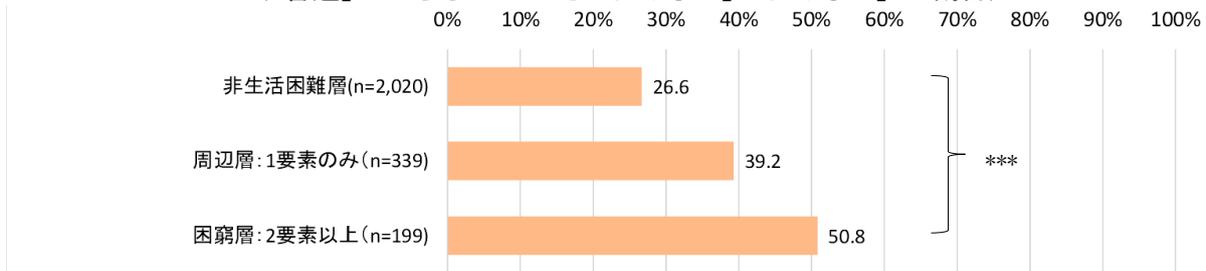
3. 保護者の生活面での課題に関する詳細分析

(1) 保護者の健康状態・生活習慣

①保護者の健康に関する認識

保護者の健康状態について、肯定的でない回答（「普通」「どちらかといえばよくない」「よくない」との回答）は、非生活困難層で26.6%、周辺層では39.2%、困窮層では50.8%であった。

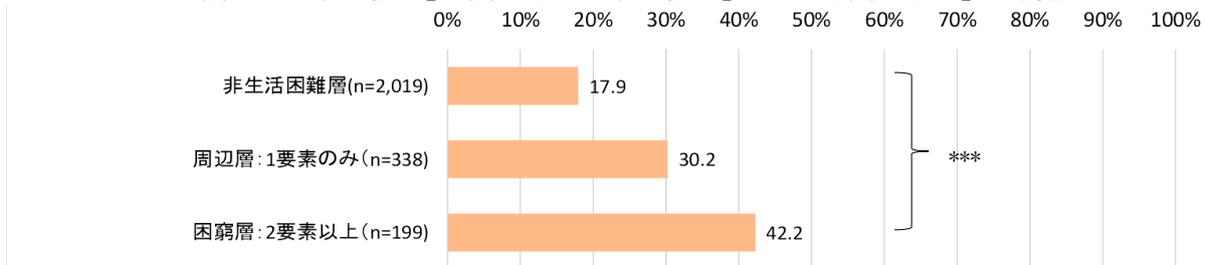
図表 3-1-1 生活困難の分類と保護者の健康状態
（「普通」「どちらかといえばよくない」「よくない」の割合）



②保護者の朝ごはんの摂取状況

保護者の平日の朝ごはんの摂取状況について、毎日食べるわけではないとの回答（「食べるほうが多い（週に3,4日）」「食べないほうが多い（週に1,2日）」「いつも食べない」との回答）は、非生活困難層では17.9%、周辺層では30.2%、困窮層では42.2%であった。

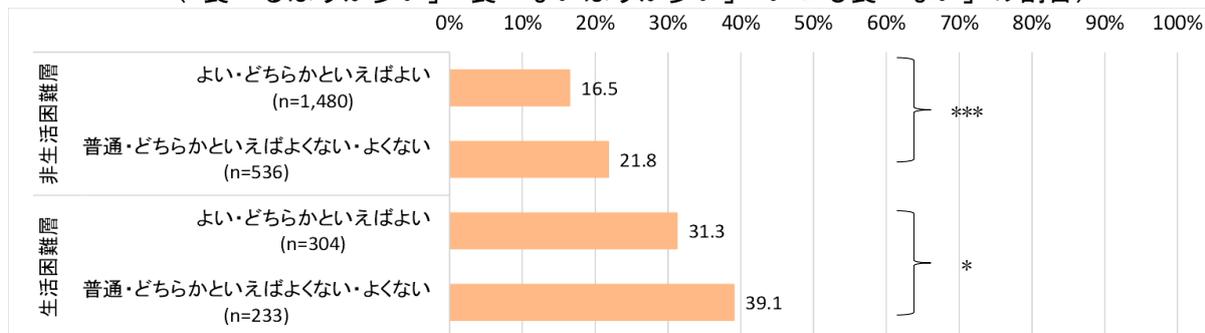
図表 3-1-2 生活困難の分類と保護者の朝ごはんの摂取状況
（「食べるほうが多い」「食べないほうが多い」「いつも食べない」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に保護者の健康状態と保護者の平日の朝ごはんの摂取状況との関係について集計すると、非生活困難層では、朝ごはんを毎日食べるわけではないとの回答は、健康状態がよい場合には16.5%、普通またはよくない場合には21.8%であった。

また、生活困難層では朝ごはんを毎日食べるわけではないとの回答は、健康状態がよい場合には31.3%、普通またはよくない場合には39.1%であった。

図表 3-1-3 生活困難の分類別、保護者の健康状態と保護者の朝ごはんの摂取状況
 (「食べるほうが多い」「食べないほうが多い」「いつも食べない」の割合)

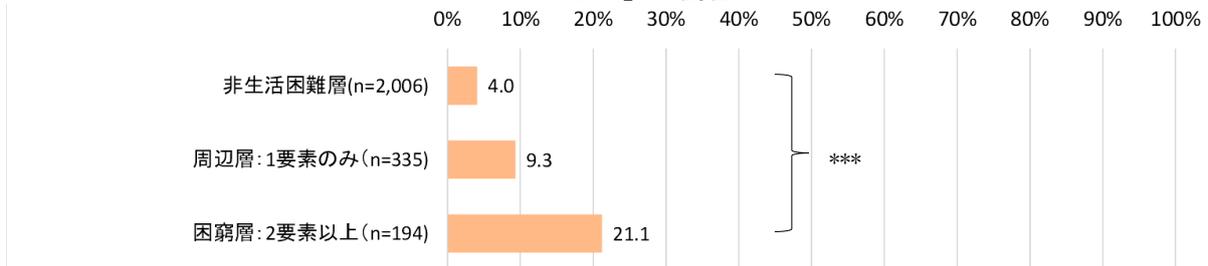


(2) 人間関係・暮らし向きの状況

① 相談相手の有無

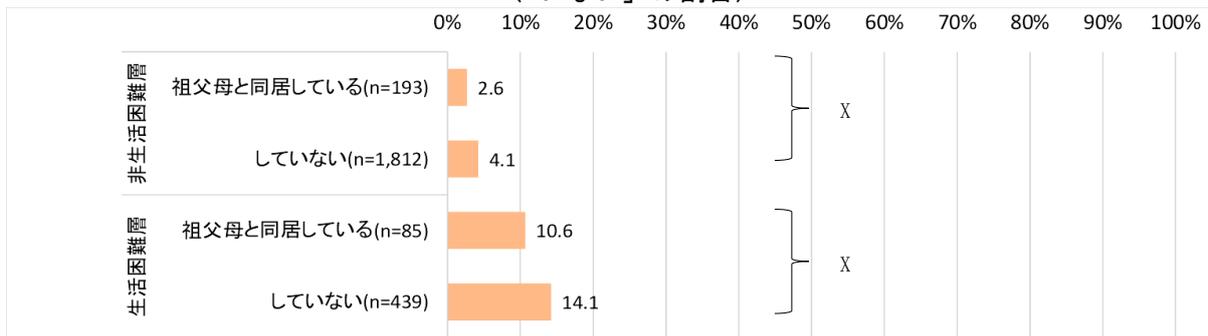
本当に困ったときや悩みがあるときに相談できる相手の有無について、「いない」との回答は、非生活困難層で4.0%、周辺層では9.3%、困窮層では21.1%であった。

図表 3-2-1 生活困難の分類と相談相手の有無
 (「いない」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に祖父母との同居の有無と相談できる相手の有無との関係について集計すると、非生活困難層・生活困難層ともに、相談できる相手が「いない」との回答割合は祖父母と同居していない世帯のほうが高いが、統計的に有意な差ではなかった。

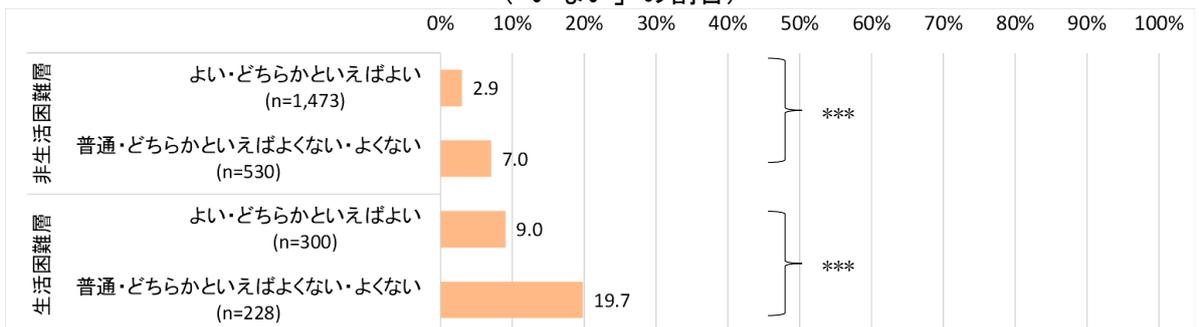
図表 3-2-2 生活困難の分類別、祖父母との同居と相談相手の有無
 (「いない」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に保護者の健康状態と相談できる相手の有無について集計すると、非生活困難層では、相談できる相手が「いない」との回答は、保護者の健康状態がよい場合には2.9%、普通またはよくない場合には7.0%であった。

また、生活困難層では、相談できる相手が「いない」との回答は、保護者の健康状態がよい場合には9.0%、普通またはよくない場合には19.7%であった。

図表 3-2-3 生活困難の分類別、保護者の健康状態と相談相手の有無
 (「いない」の割合)

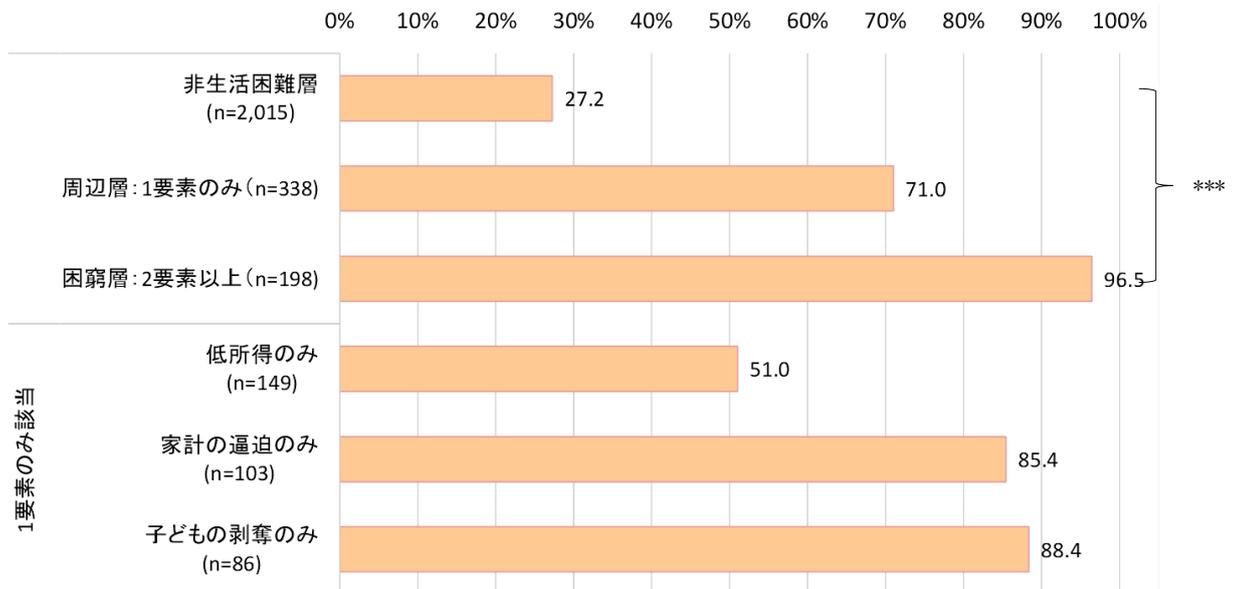


②暮らし向きに対する認識

現在の暮らし向きに対する認識について、「大変苦しい」「やや苦しい」との回答は、非生活困難層では27.2%、周辺層では71.0%、困窮層では96.5%であった。

なお、「低所得のみ」に該当する世帯では51.0%、「家計の逼迫のみ」に該当する世帯では85.4%、「子どもの剥奪のみ」に該当する世帯では88.4%であった⁷。

図表 3-2-4 生活困難の分類と暮らし向きに対する認識
(「大変苦しい」「やや苦しい」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に保護者の健康状態と現在の暮らし向きに対する認識との関係について集計すると、非生活困難層では、暮らし向きについて「大変苦しい」「やや苦しい」との回答は、保護者の健康状態がよい場合には23.4%、普通またはよくない場合には38.0%であった。

また、生活困難層では、暮らし向きについて「大変苦しい」「やや苦しい」との回答は、保護者の健康状態がよい場合には73.9%、普通またはよくない場合には88.8%であった。

図表 3-2-5 生活困難の分類別、保護者の健康状態と暮らし向きに対する認識
(「大変苦しい」「やや苦しい」の割合)

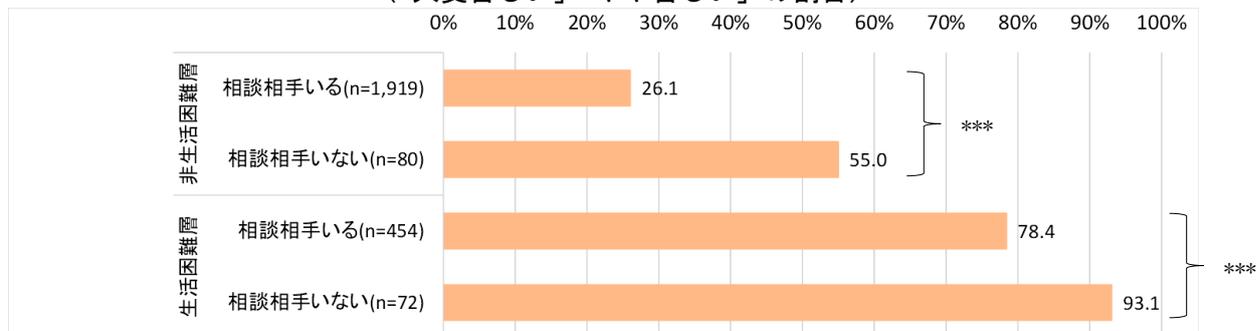


⁷ 生活困難の3要素別の集計に関しては、集計対象度数が比較的少ないことも考慮し、ここでは細かな分類による検定の結果は示していない。

生活困難層に該当するか否かの別に相談相手の有無と現在の暮らし向きに対する認識との関係について集計すると、非生活困難層では、暮らし向きについて「大変苦しい」「やや苦しい」との回答は、相談相手がいる場合には26.1%、いない場合には55.0%であった。

また、生活困難層では、暮らし向きについて「大変苦しい」「やや苦しい」との回答は、相談相手がいる場合には78.4%、いない場合には93.1%であった。

図表 3-2-6 生活困難の分類別、保護者の相談相手の有無と暮らし向きに対する認識
(「大変苦しい」「やや苦しい」の割合)



(3) 子どもとの関わり

①子どもとの関わりの場面（勉強をみること）

家庭で「お子さんの勉強をみる」ことがどの程度あるかについて、頻度が相対的に低い回答（「めったにない・理由があってできない」「月に1～2回」「週に1～2回」との回答）は、非生活困難層で48.9%、周辺層では52.2%、困窮層では58.0%であった。

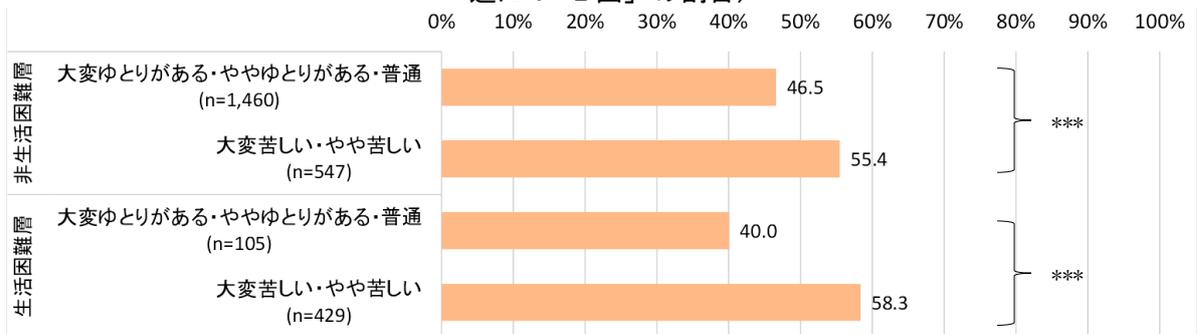
図表 3-3-1 生活困難の分類と子どもの勉強をみる頻度
 （「勉強をみる」について「めったにない・理由があってできない」「月に1～2回」「週に1～2回」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に現在の暮らし向きに対する認識と子どもの勉強をみる頻度との関係について集計すると、非生活困難層では、勉強をみる頻度が相対的に低い回答は、暮らし向きが普通またはゆとりがある場合には46.5%、暮らし向きが苦しい場合には55.4%であった。

また、生活困難層では、勉強をみる頻度が相対的に低い回答は、暮らし向きが普通またはゆとりがある場合には40.0%、暮らし向きが苦しい場合には58.3%であった。

図表 3-3-2 生活困難の分類別、暮らし向きに対する認識と子どもの勉強をみる頻度
 （「勉強をみる」について「めったにない・理由があってできない」「月に1～2回」「週に1～2回」の割合）

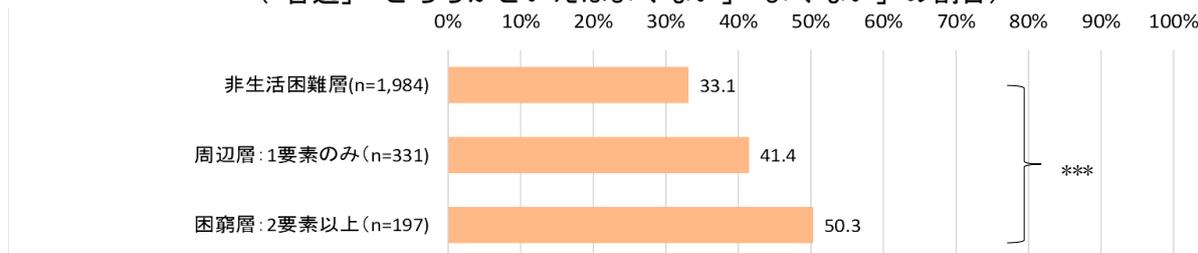


4. 子どもの生活習慣・健康面での課題に関する詳細分析

①子どもの健康に対する認識

子ども自身の健康状態について、肯定的でない回答（「普通」「どちらかといえばよくない」「よくない」との回答）は、非生活困難層で33.1%、周辺層では41.4%、困窮層では50.3%であった。

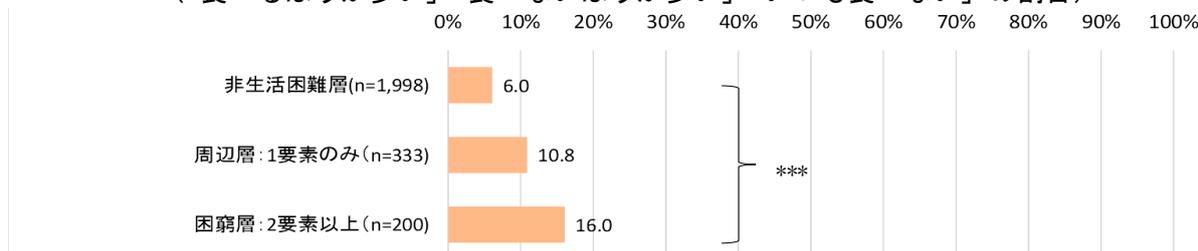
図表 4-1-1 生活困難の分類と子どもの健康状態
（「普通」「どちらかといえばよくない」「よくない」の割合）



②子どもの朝ごはんの摂取状況

平日（学校に行く日）の子どもの朝ごはんの摂取状況について、毎日食べるわけではないとの回答（「食べるほうが多い（週に3,4日）」「食べないほうが多い（週に1,2日）」「いつも食べない」との回答）は、非生活困難層で6.0%、周辺層では10.8%、困窮層では16.0%であった。

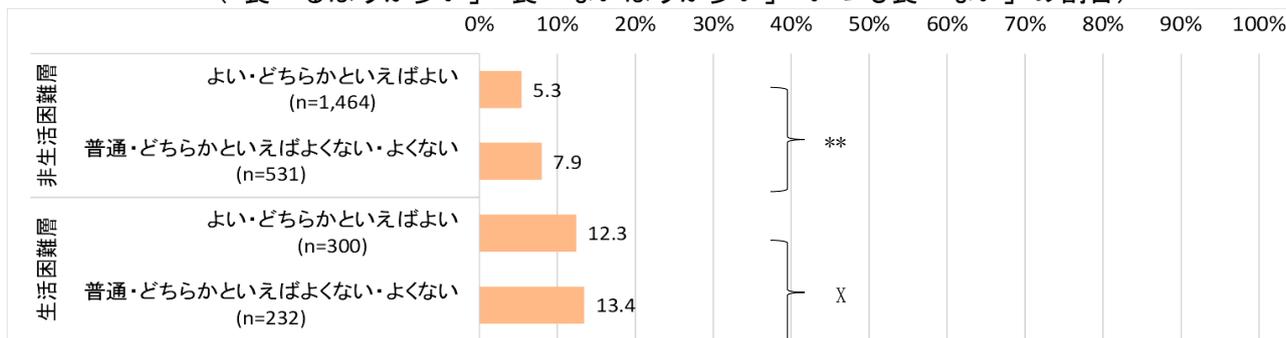
図表 4-1-2 生活困難の分類と子どもの朝ごはんの摂取状況
（「食べるほうが多い」「食べないほうが多い」「いつも食べない」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に保護者の健康状態と子どもの朝ごはんの摂取状況との関係について集計すると、非生活困難層では、子どもが朝ごはんを毎日食べるわけではないとの回答は、健康状態がよい場合には5.3%、普通またはよくない場合には7.9%であった。

なお、生活困難層では、子どもが朝ごはんを毎日食べるわけではないとの回答には、保護者の健康状態によって統計的に有意な差は見られなかった。

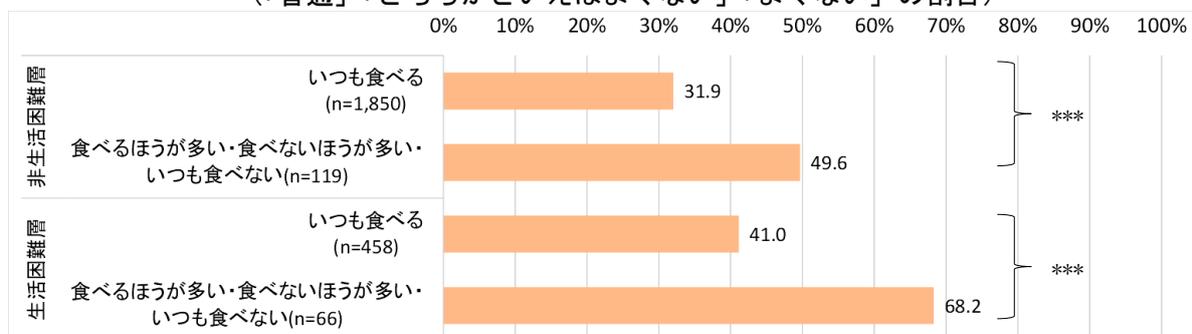
図表 4-1-3 生活困難の分類別、保護者の健康状態と子どもの朝ごはんの摂取状況
（「食べるほうが多い」「食べないほうが多い」「いつも食べない」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に子どもの朝ごはんの摂取状況と子どもの健康状態との関係について集計すると、非生活困難層では、健康状態について肯定的でない回答は、朝ごはんを毎日食べている場合には31.9%、毎日食べていない場合には49.6%であった。

また、生活困難層では、健康状態について肯定的でない回答は、朝ごはんを毎日食べている場合には41.0%、毎日食べていない場合には68.2%であった。

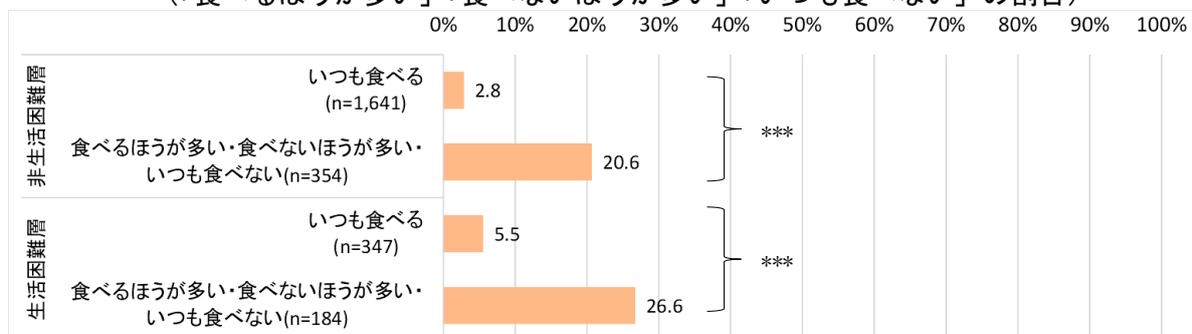
図表 4-1-4 生活困難の分類別、子どもの朝ごはんの摂取状況と子どもの健康状態（「普通」「どちらかといえばよくない」「よくない」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に保護者の朝ごはんの摂取状況と子どもの朝ごはんの摂取状況との関係について集計すると、非生活困難層では、子どもが朝ごはんを毎日食べるわけではないとの回答は、保護者が朝ごはんを毎日食べている場合には2.8%、毎日食べていない場合には20.6%であった。

また、生活困難層では、子どもが朝ごはんを毎日食べるわけではないとの回答は、保護者が朝ごはんを毎日食べている場合には5.5%、毎日食べていない場合には26.6%であった。

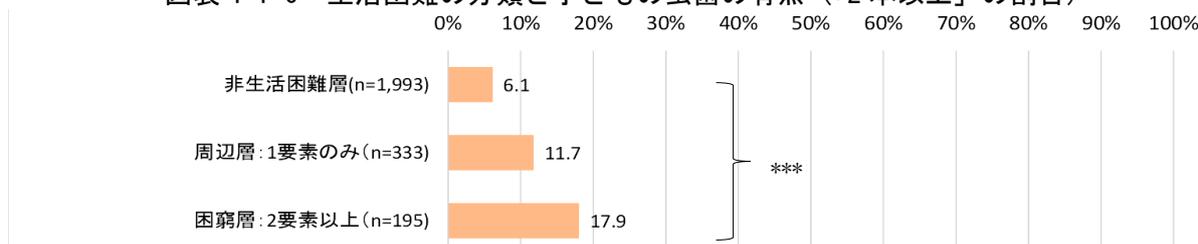
図表 4-1-5 生活困難の分類別、保護者の朝ごはんの摂取状況と子どもの朝ごはんの摂取状況（「食べるほうが多い」「食べないほうが多い」「いつも食べない」の割合）



③虫歯の有無

子どもの虫歯の本数⁸について、2本以上あるとの回答は、非生活困難層で6.1%、周辺層では11.7%、困窮層では17.9%であった。

図表 4-1-6 生活困難の分類と子どもの虫歯の有無（「2本以上」の割合）

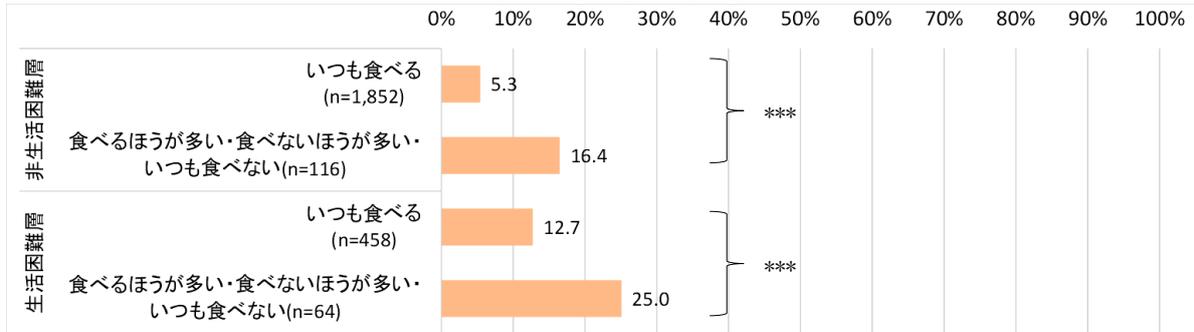


⁸ 子どもの虫歯の本数について、保護者から回答を得たものである点には留意が必要である。

生活困難層に該当するか否かの別に子どもの朝ごはんの摂取状況と虫歯の状況との関係について集計すると、非生活困難層では、虫歯が2本以上あるとの回答は、朝ごはんを毎日食べている場合には5.3%、毎日食べていない場合には16.4%であった。

また、生活困難層では、虫歯が2本以上あるとの回答は、朝ごはんを毎日食べている場合には12.7%、毎日食べていない場合には25.0%であった⁹。

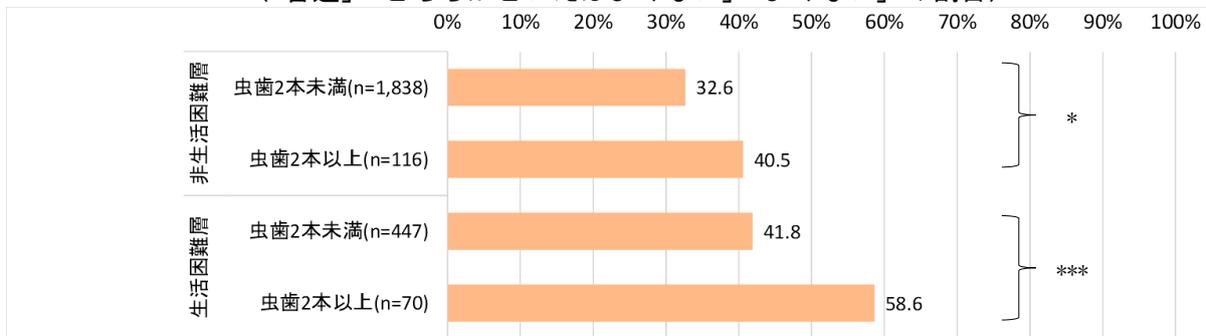
図表 4-1-7 生活困難の分類別、子ども朝ごはんの摂取状況と子どもの虫歯の有無
 (「2本以上」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に子どもの虫歯の有無と子どもの健康状態との関係について集計すると、非生活困難層では、健康状態について肯定的でない回答は、虫歯が2本未満の場合には32.6%、虫歯が2本以上の場合には40.5%であった。

また、生活困難層では、健康状態について肯定的でない回答は、虫歯が2本未満の場合には41.8%、虫歯が2本以上の場合には58.6%であった。

図表 4-1-8 生活困難の分類別、子どもの虫歯の有無と子どもの健康状態
 (「普通」「どちらかといえばよくない」「よくない」の割合)



⁹ なお、保護者の朝ごはんの摂取状況と子どもの虫歯の状況との関係についても同様の傾向がみられる。

5. 子どもの学校生活・学習面での課題に関する詳細分析

(1) 友だちとの関係性・学校生活

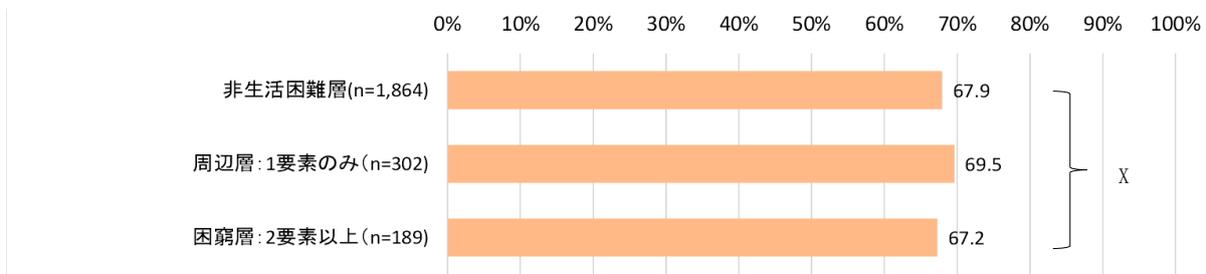
① 友だちとのコミュニケーション

困っていることや悩みごと、楽しいことや悲しいことを友だちに話すかについて、「よく話す」「時々話す」との回答は約7割で、生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られなかった。

また、学校の友だちに会うことが楽しみかについて、「とても楽しみ」との回答も約7割となっており、この点に関しても生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られなかった。

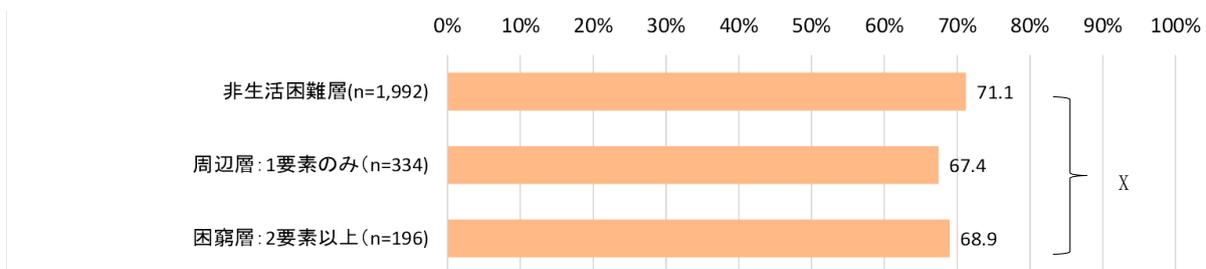
他方、勉強がわからないときに誰に教えてもらうかについて、「友だち」との回答は、非生活困難層で36.6%、周辺層では38.4%、困窮層では45.7%と統計的に有意な差が見られた。

図表 5-1-1 生活困難の分類と友だちとの会話の状況
(「よく話す」「時々話す」の割合)

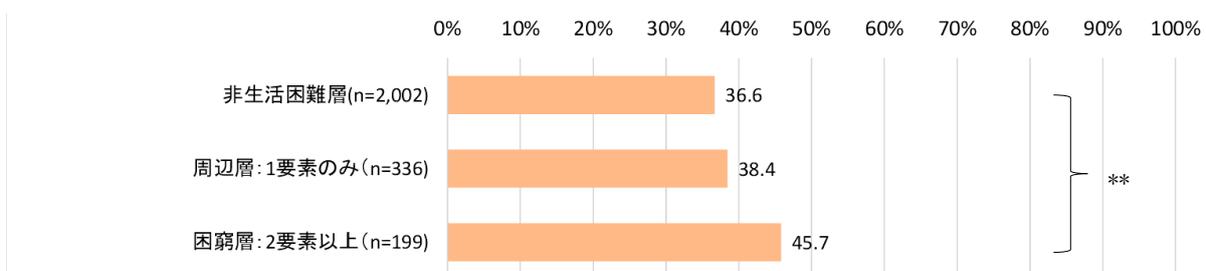


※会話の状況について、「無回答」に加え、「どれにもあてはまらない」との回答も集計対象外とした。

図表 5-1-2 生活困難の分類と学校の友だちに会うことが楽しみか否か
(「とても楽しみ」の割合)



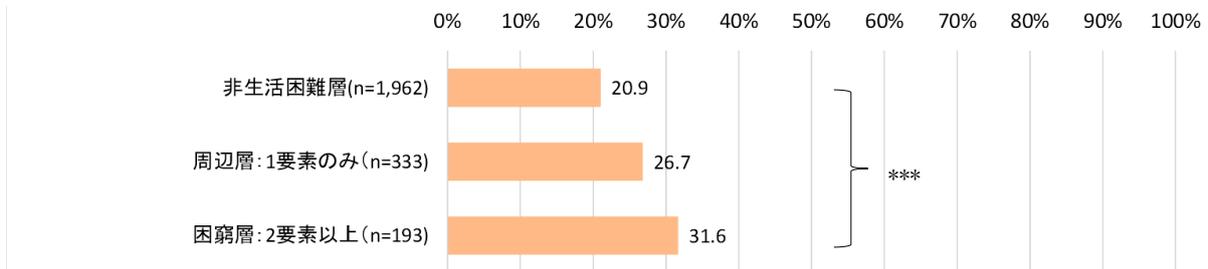
図表 5-1-3 生活困難の分類と勉強を教えてもらう相手としての「友だち」との回答



②友だちに好かれていると思うか否か

友だちに好かれていると思うか否かについて、肯定的でない回答（「あまり思わない」「そう思わない」との回答）は、非生活困難層で20.9%。周辺層では26.7%、困窮層では31.6%であった。

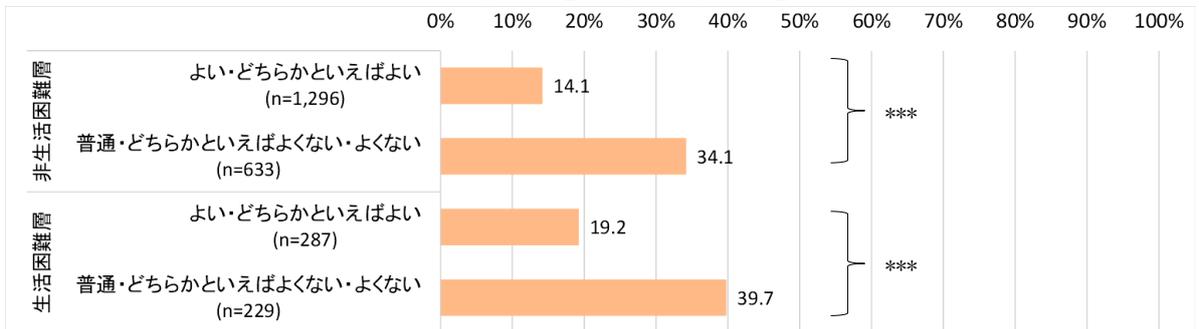
図表 5-1-4 生活困難の分類と友だちに好かれていると思うか否か
（「あまり思わない」「そう思わない」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に子どもの健康状態と友だちに好かれていると思うか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、友だちとの関係について肯定的でない回答は、健康状態がよい場合には14.1%、普通またはよくない場合には34.1%であった。

また、生活困難層では、友だちとの関係について肯定的でない回答は、健康状態がよい場合には19.2%、普通またはよくない場合には39.7%であった。

図表 5-1-5 生活困難の分類別、子どもの健康状態と友だちに好かれていると思うか否か
（「あまり思わない」「そう思わない」の割合）



③休み時間を楽しみと思うか否か

学校の休み時間を楽しみと思うか否かについて、「とても楽しみ」との回答は、非生活困難層で66.8%、周辺層では58.0%、困窮層では56.6%であった。

図表 5-1-6 生活困難の分類と学校の休み時間を楽しみか否か
 (「とても楽しみ」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に子どもの健康状態と休み時間を楽しみと思うか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、休み時間が「とても楽しみ」との回答は、健康状態がよい場合には73.7%、普通またはよくない場合には53.2%であった。
 また、生活困難層では、休み時間が「とても楽しみ」との回答は、健康状態がよい場合には69.8%、普通またはよくない場合には42.9%であった。

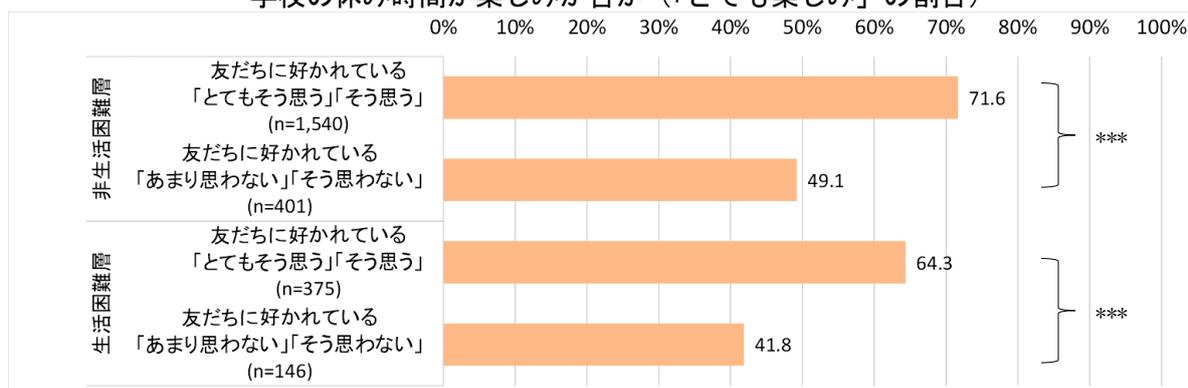
図表 5-1-7 生活困難の分類別、子どもの健康状態と学校の休み時間を楽しみか否か
 (「とても楽しみ」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に友だちに好かれていると思うか否かと休み時間を楽しみと思うか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、休み時間が「とても楽しみ」との回答は、友だちに好かれていると思う場合には 71.6%、好かれていないと思う場合には 49.1%であった。

また、生活困難層では、休み時間が「とても楽しみ」との回答は、友だちに好かれていると思う場合には 64.3%、好かれていないと思う場合には 41.8%であった。

図表 5-1-8 生活困難の分類別、友だちに好かれていると思うか否かと学校の休み時間が楽しみか否か（「とても楽しみ」の割合）



(2) 先生との関係性

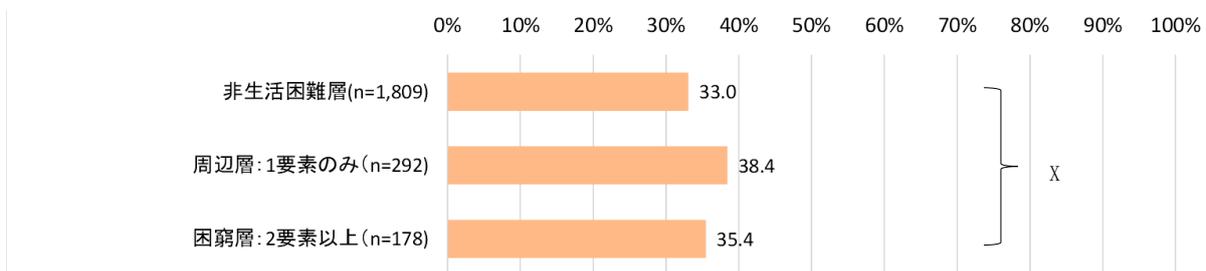
①学校の先生とのコミュニケーション

困っていることや悩みごと、楽しいことや悲しいことを学校の先生に話すか否かについて、「よく話す」「時々話す」との回答は3割～4割で、生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られなかった。

また、先生に会うことが楽しみか否かについて、「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は5割～6割となっており、この点についても、生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られなかった。

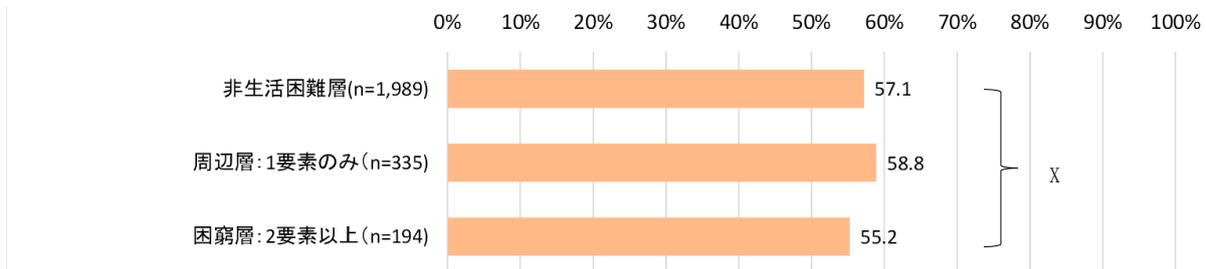
他方、勉強がわからないときに誰に教えてもらうかについて、「学校の先生」との回答は、非生活困難層で36.5%、周辺層では41.4%、困窮層では46.2%と統計的に有意な差が見られた。

図表 5-2-1 生活困難の分類と先生との会話の状況
 (「よく話す」「時々話す」の割合)

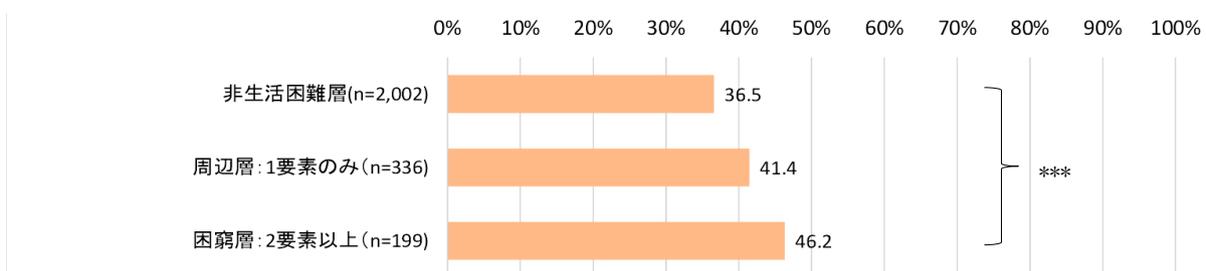


※会話の状況について、「無回答」に加え、「どれにもあてはまらない」との回答も集計対象外とした。

図表 5-2-2 生活困難の分類と先生に会うことが楽しみか否か
 (「とても楽しみ」「楽しみ」の割合)



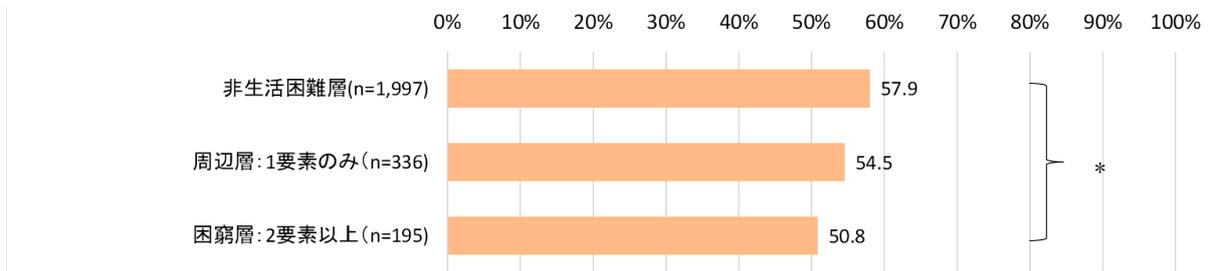
図表 5-2-3 生活困難の分類と勉強を教えてもらう相手としての「学校の先生」との回答



②学校の授業が楽しみか否か

学校の授業（体育・音楽・図工・家庭科以外）を楽しみと思うか否かについて、「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は、非生活困難層で57.9%。周辺層では54.5%、困窮層では50.8%であった。

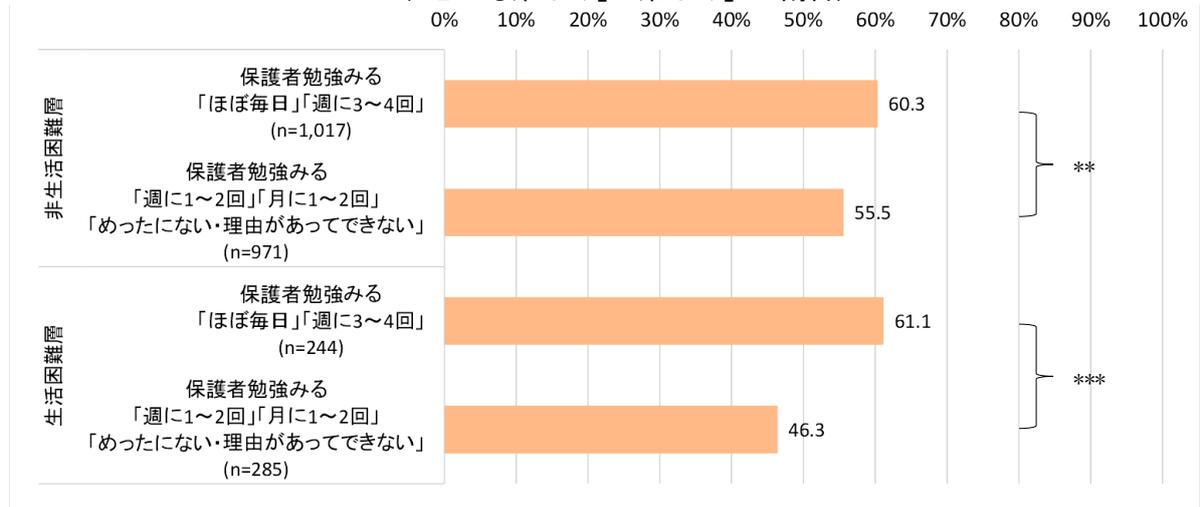
図表 5-2-4 生活困難の分類と学校の授業が楽しみか否か
 (「とても楽しみ」「楽しみ」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に保護者が勉強をみる頻度と子どもが学校の授業を楽しみと思うか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、学校の授業が「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は、保護者が勉強をみる頻度が高い場合には60.3%、頻度が低い場合には55.5%であった。

また、生活困難層では、学校の授業が「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は、保護者が勉強をみる頻度が高い場合には61.1%、頻度が低い場合には46.3%であった。

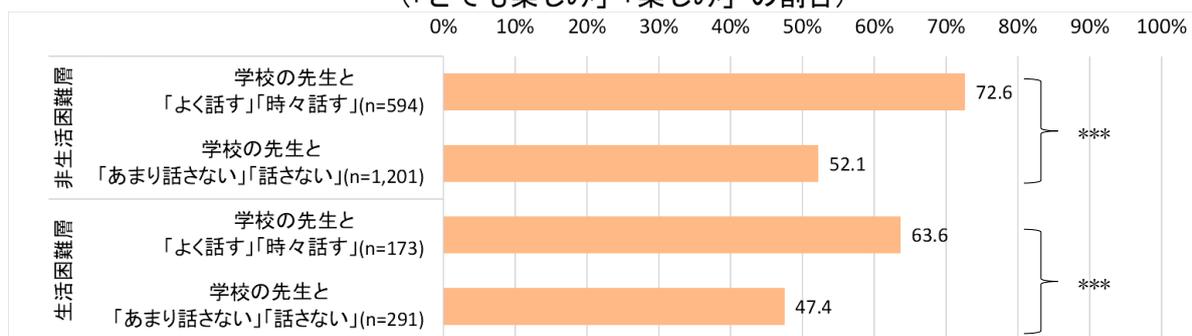
図表 5-2-5 生活困難の分類別、保護者が勉強をみる頻度と学校の授業が楽しみか否か
 (「とても楽しみ」「楽しみ」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に困っていることや悩みごと、楽しいことや悲しいことを学校の先生に話すかと、学校の授業を楽しみと思うか否かについて集計すると、非生活困難層では、学校の授業が「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は、学校の先生と話をする場合には 72.6%、話をあまりしない場合には 52.1%であった。

また、生活困難層では、学校の授業が「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は、学校の先生と話をする場合には 63.6%、話をしない場合には 47.4%であった。

図表 5-2-6 生活困難の分類別、学校の先生との会話の状況と学校の授業が楽しみか
 (「とても楽しみ」「楽しみ」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に学校の先生に勉強を教えてもらうことがあることと、学校の授業を楽しみと思うか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、学校の授業が「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は、学校の先生に勉強を教えてもらう場合には 64.8%、教えてもらわない場合には 54.0%であった。

また、生活困難層では、学校の授業が「とても楽しみ」「楽しみ」との回答は、学校の先生に勉強を教えてもらう場合には 57.8%、教えてもらわない場合には 49.7%であった。

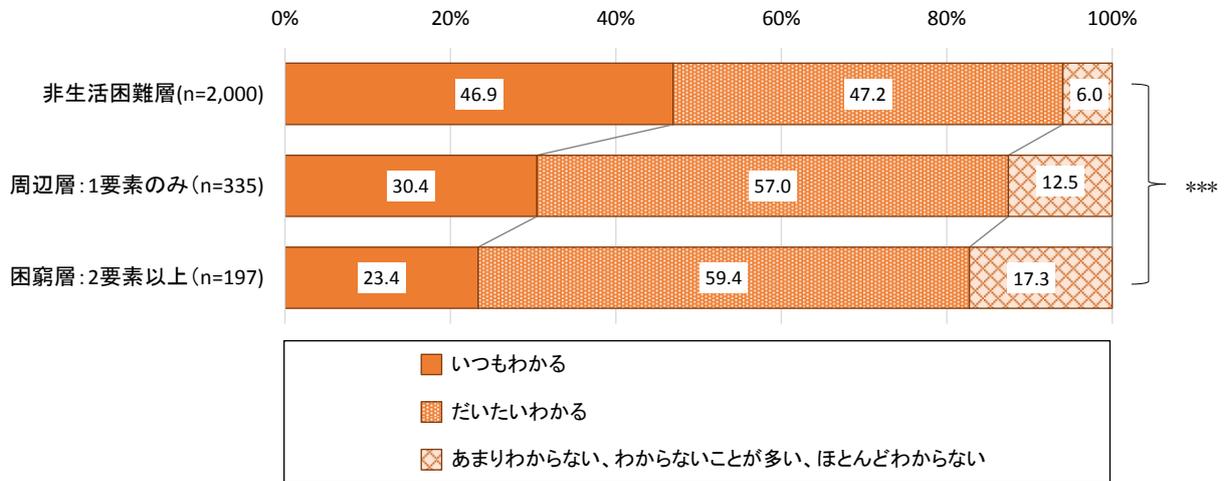
図表 5-2-7 生活困難の分類別、学校の先生に勉強を教えてもらうことと学校の授業が楽しみか
 (「とても楽しみ」「楽しみ」の割合)



(3) 学習の状況（学校の授業の理解度）

学校の授業がわかるか否かについて、「いつもわかる」との回答は、非生活困難層で 46.9%、周辺層では 30.4%、困窮層では 23.4%であった。

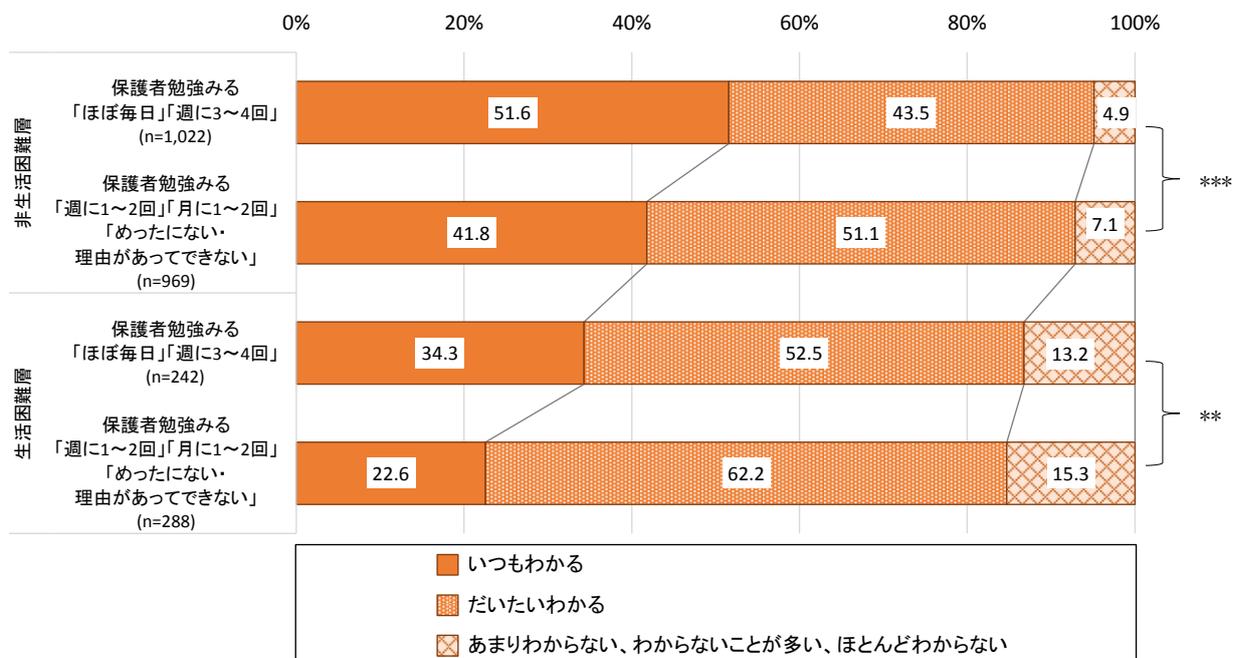
図表 5-3-1 生活困難の分類と授業がわかるか否か



生活困難層に該当するか否かの別に保護者が勉強をみる頻度と学校の授業がわかるか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、学校の授業が「いつもわかる」との回答は、保護者が勉強をみる頻度が高い場合には 51.6%、頻度が低い場合には 41.8%であった。

また、生活困難層では、学校の授業が「いつもわかる」との回答は、保護者が勉強をみる頻度が高い場合には 34.3%、頻度が低い場合には 22.6%であった。

図表 5-3-2 生活困難の分類別、保護者が勉強をみる頻度と授業がわかるか否か



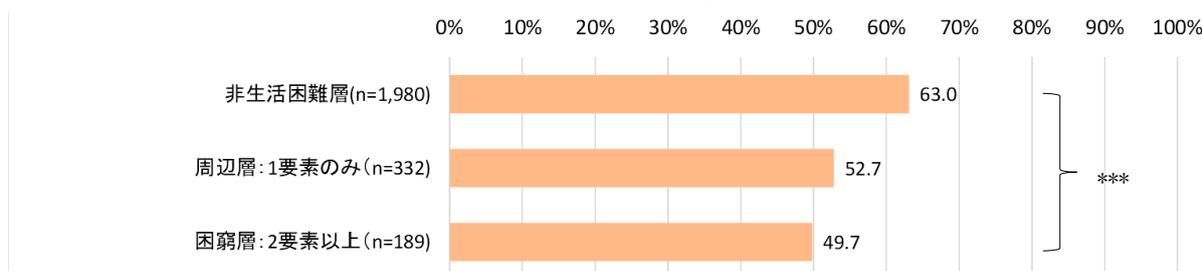
6. 子どもの心理的安定・居場所の面での課題に関する詳細分析

(1) 自己肯定感・不登校傾向

① 自己肯定感

「自分は価値のある人間だと思う」か否かについて、「とても思う」「思う」との回答は、非生活困難層で63.0%、周辺層では52.7%、困窮層では49.7%であった。

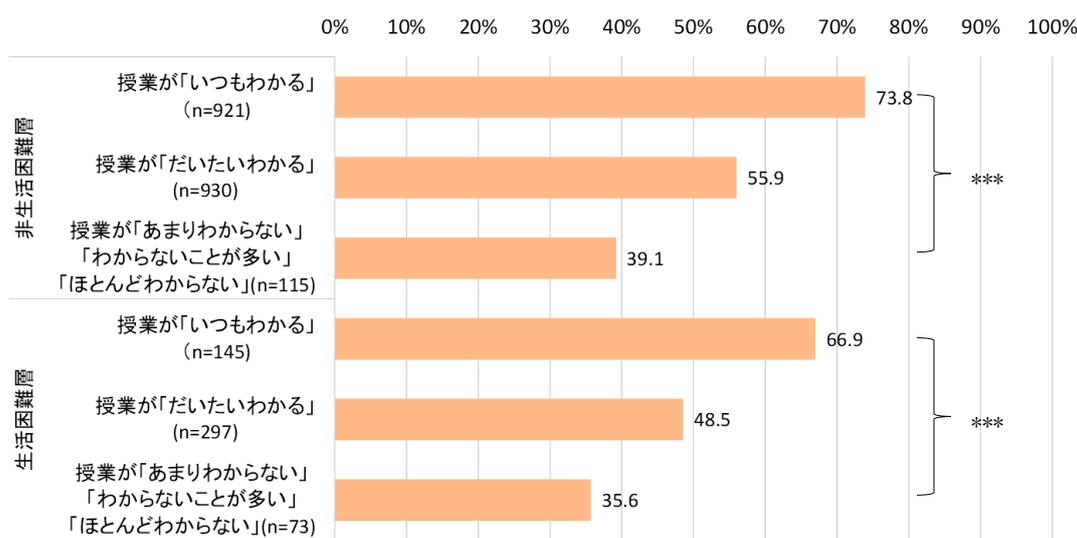
図表 6-1-1 生活困難の分類と自分は価値のある人間だと思うか否か
（「とても思う」「思う」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に学校の授業の理解度と自分は価値のある人間だと思うか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、価値がある人間だと「とても思う」「思う」との回答は、授業が「いつもわかる」場合には73.8%、「だいたいわかる」場合には55.9%、わからない場合には39.1%であった。

また、生活困難層では、価値がある人間だと「とても思う」「思う」との回答は、授業が「いつもわかる」場合には66.9%、「だいたいわかる」場合には48.5%、わからない場合には35.6%であった。

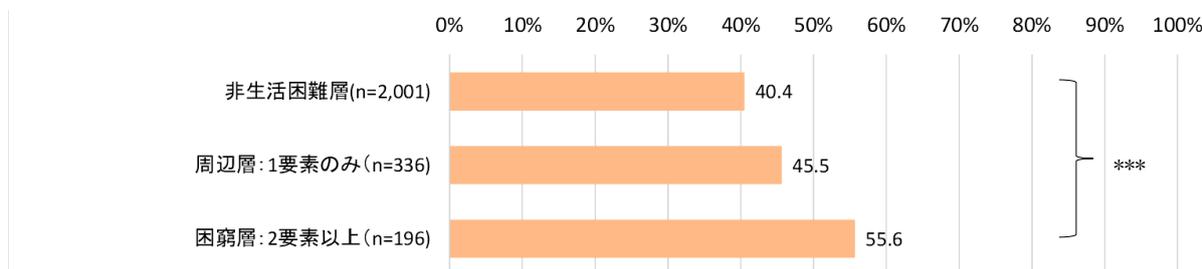
図表 6-1-2 生活困難の分類別、学校の授業の理解度と自分は価値のある人間だと思うか否か
（「とても思う」「思う」の割合）



②不登校傾向

「学校に行きたくないと思った」か否かについて、「よくあった」「時々あった」との回答は、非生活困難層で40.4%、周辺層では45.5%、困窮層では55.6%であった。

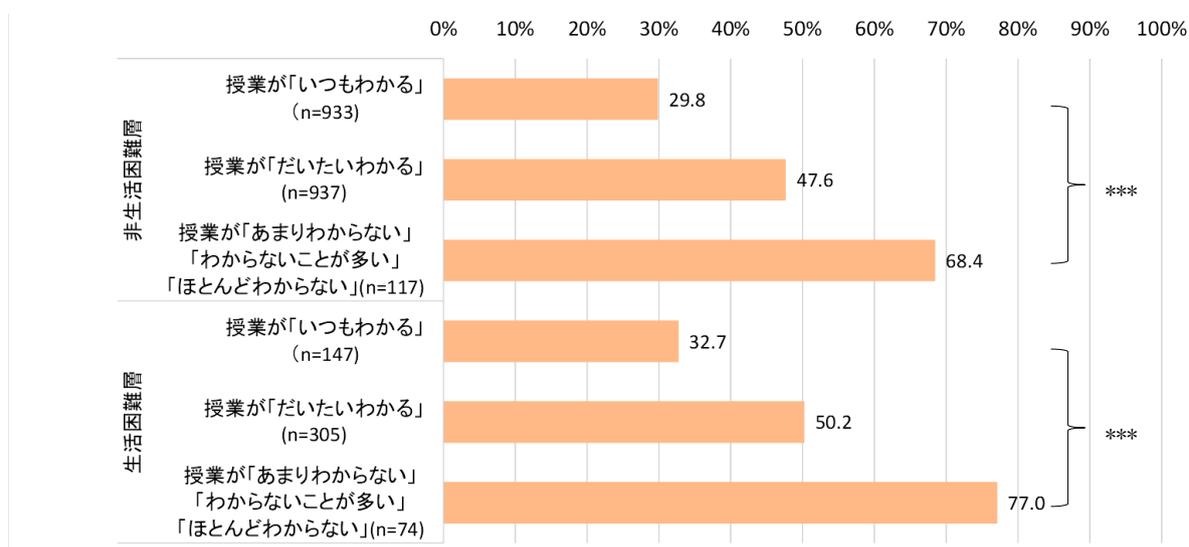
図表 6-1-3 生活困難の分類と学校に行きたくないと思ったか否か
（「よくあった」「時々あった」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に学校の授業の理解度と学校に行きたくないと思ったか否かとの関係について集計すると、非生活困難層では、学校に行きたくないと思ったことが「よくあった」「時々あった」との回答は、授業が「いつもわかる」場合には29.8%、「だいたいわかる」場合には47.6%、わからない場合には68.4%であった。

また、生活困難層では、学校に行きたくないと思ったことが「よくあった」「時々あった」との回答は、授業が「いつもわかる」場合には32.7%、「だいたいわかる」場合には50.2%、わからない場合には77.0%であった。

図表 6-1-4 生活困難の分類別、学校の授業の理解度と学校に行きたくないと思ったか否か
（「よくあった」「時々あった」の割合）

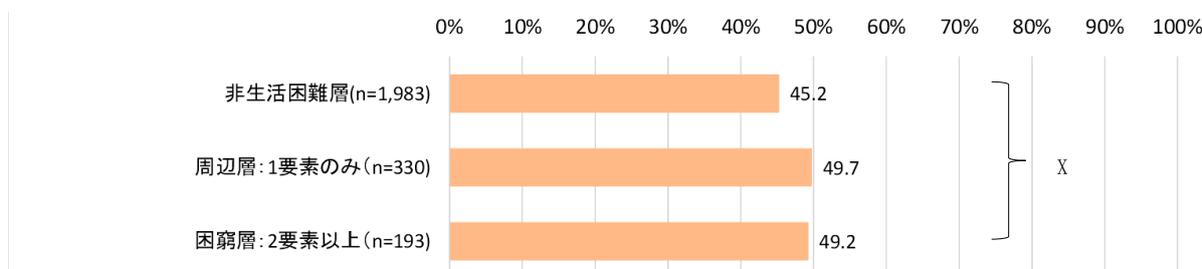


(2) 居場所に対するニーズ

① 夕ご飯を食べることができる場所に関するニーズの有無

「家の人がないとき、夕ご飯をみんなで食べることができる場所」について「使ってみたい」「興味がある」と回答したのは、4割～5割で、生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られなかった¹⁰。

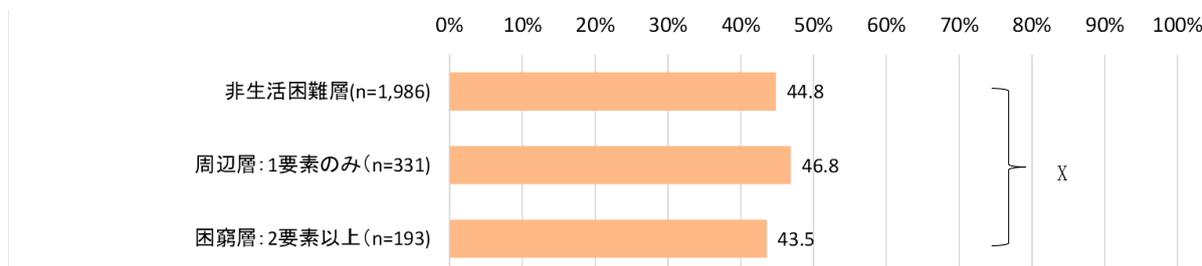
図表 6-2-1 生活困難の分類と夕ご飯を食べることができる場所に関するニーズ
（「使ってみたい」「興味がある」の割合）



② 勉強を無料でみてくれる場所に関するニーズの有無

「大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所」について「使ってみたい」「興味がある」と回答したのは、4割～5割で、生活困難の分類別に統計的に有意な差は見られなかった。

図表 6-2-2 生活困難の分類と勉強を無料でみてくれる場所に関するニーズ
（「使ってみたい」「興味がある」の割合）

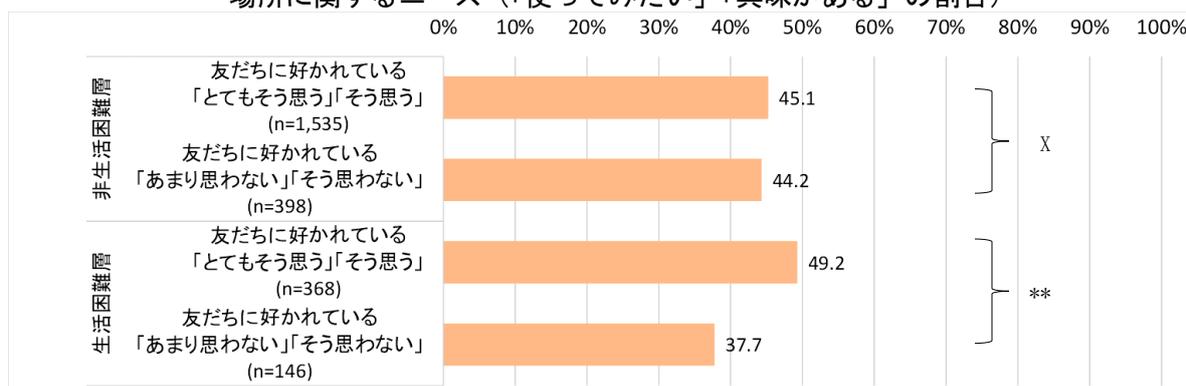


¹⁰ ただし、生活困難層に該当するか否かの別（非生活困難層／生活困難層）の集計では10%水準で統計的に有意な差が見られ、生活困難層においてニーズがより高くなっている。

生活困難層に該当するか否かの別に友だちに好かれていると思うか否かと勉強を無料でみてる場所に関するニーズとの関係について集計すると、生活困難層では、勉強を無料でみてる場所を「使ってみたい」「興味がある」との回答は、友だちに好かれていると思う場合には49.2%、好かれていないと思う場合には37.7%であった。

なお、非生活困難層では、勉強を無料でみてる場所を「使ってみたい」「興味がある」との回答には、友だちに好かれていると思うか否かによって統計的に有意な差は見られなかった。

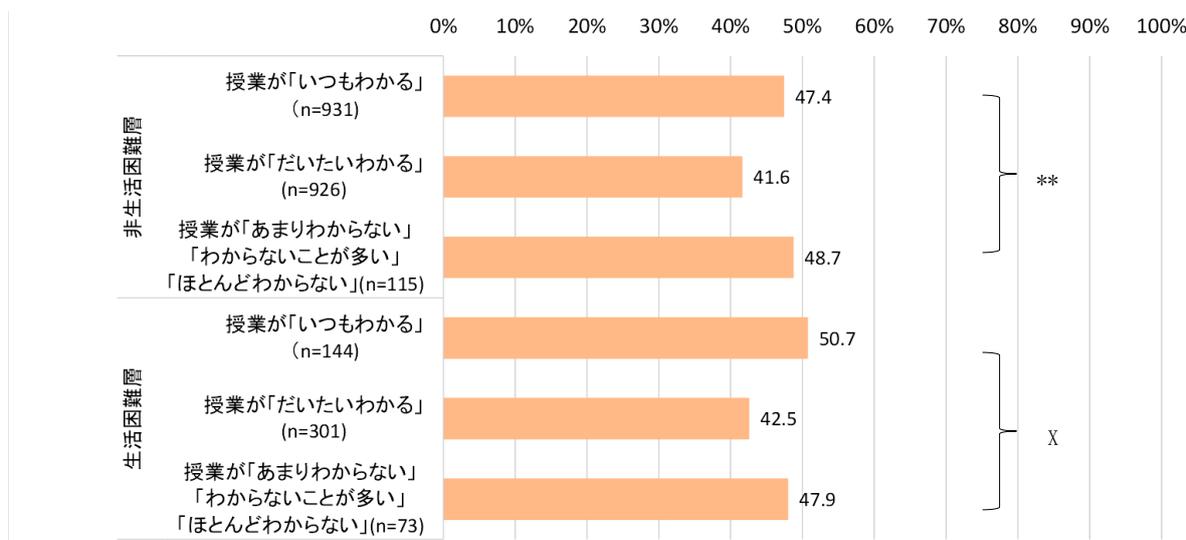
図表 6-2-3 生活困難の分類別、友だちに好かれていると思うか否かと勉強を無料でみてる場所に関するニーズ（「使ってみたい」「興味がある」の割合）



生活困難層に該当するか否かの別に学校の授業の理解度と勉強を無料でみてる場所に関するニーズとの関係について集計すると、非生活困難層では、勉強を無料でみてる場所を「使ってみたい」「興味がある」との回答は、授業が「いつもわかる」場合には47.4%、「だいたいわかる」場合には41.6%、わからない場合には48.7%であった。

なお、生活困難層では、勉強を無料でみてる場所を「使ってみたい」「興味がある」との回答には、学校の授業の理解度によって統計的に有意な差は見られなかった。

図表 6-2-4 生活困難の分類別、学校の授業の理解度と勉強を無料でみてる場所に関するニーズ（「使ってみたい」「興味がある」の割合）



③なんでも相談できる場所に関するニーズの有無

「(学校以外で) なんでも相談できる場所」について「使ってみたい」「興味がある」と回答したのは、非生活困難層で 47.0%、周辺層では 48.8%、困窮層では 55.2%であった。

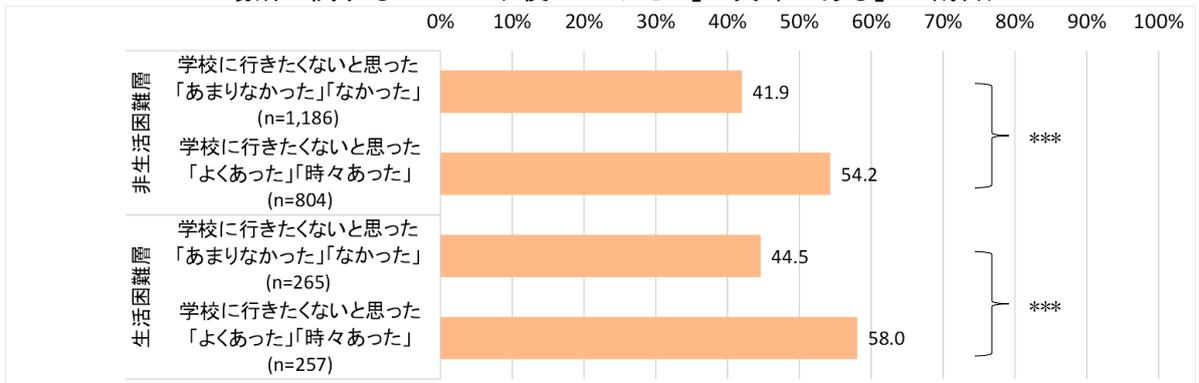
図表 6-2-5 生活困難の分類となんでも相談できる場所に関するニーズ
 (「使ってみたい」「興味がある」の割合)



生活困難層に該当するか否かの別に学校に行きたくないと思ったか否かとなんでも相談できる場所に関するニーズとの関係について集計すると、非生活困難層では、なんでも相談できる場所を「使ってみたい」「興味がある」との回答は、学校に行きたくないと思ったことがあまりなかった場合には 41.9%、行きたくないことがあった場合には 54.2%であった。

また、生活困難層では、なんでも相談できる場所を「使ってみたい」「興味がある」との回答は、学校に行きたくないと思ったことがあまりなかった場合には 44.5%、行きたくないことがあった場合には 58.0%であった。

図表 6-2-6 生活困難の分類別、学校に行きたくないと思ったか否かとなんでも相談できる場所に関するニーズ (「使ってみたい」「興味がある」の割合)



7. 連鎖の状況に関する詳細分析

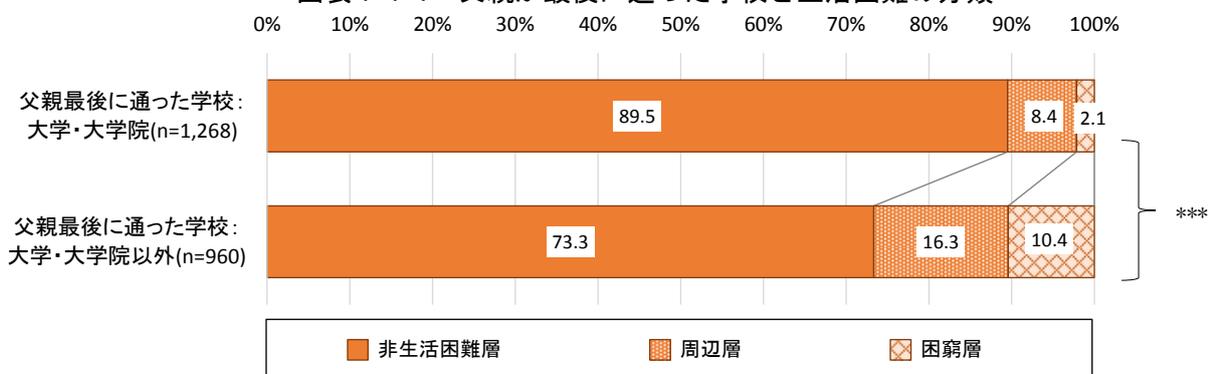
(1) 子どもへの進学期待

①父親・母親が最後に通った学校¹¹と生活困難の分類

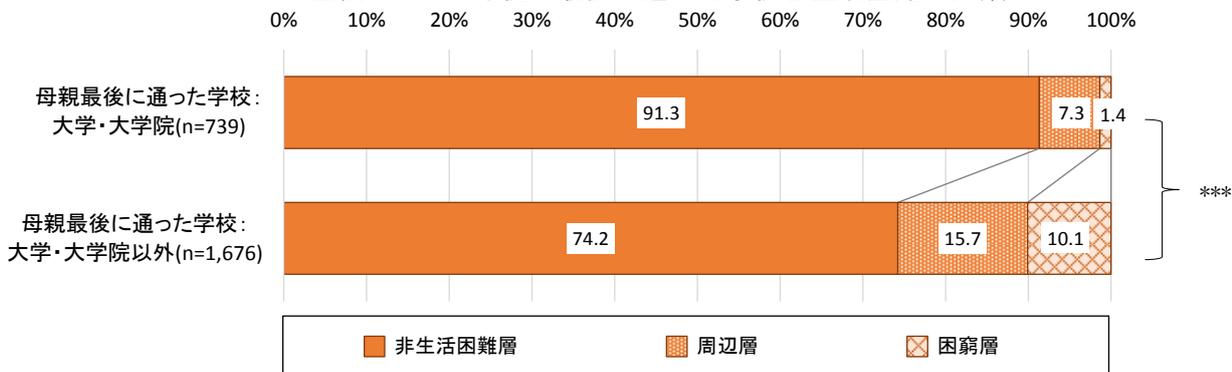
父親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合とそれ以外の場合とに分類し、生活困難の分類との関係について集計すると、非生活困難層に該当する割合は、父親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合には89.5%、それ以外の場合には73.3%であった。

同様に、母親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合とそれ以外の場合とに分類し、生活困難の分類との関係について集計すると、非生活困難層に該当する割合は、母親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合には91.3%、それ以外の場合には74.2%であった。

図表 7-1-1 父親が最後に通った学校と生活困難の分類



図表 7-1-2 母親が最後に通った学校と生活困難の分類



¹¹ 父親が最後に通った学校を把握するに当たっては、①回答者の子どもからみた関係が「父親」、②回答者の子どもからみた関係が「母親」であり婚姻状況で「結婚している」と回答、のいずれかに該当する場合を集計対象とした。同様に、母親が最後に通った学校を把握するに当たっては、①回答者の子どもからみた関係が「母親」、②回答者の子どもからみた関係が「父親」であり婚姻状況で「結婚している」と回答、のいずれかに該当する場合を集計対象とした。

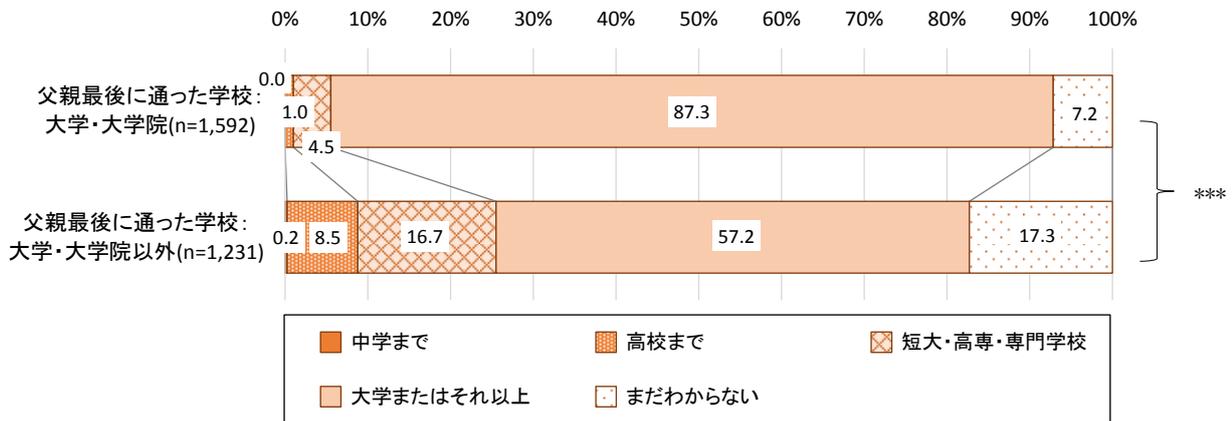
②父親・母親が最後に通った学校と子どもに受けさせたいと思う教育段階

父親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合とそれ以外の場合とに分類し、子どもにどの段階まで教育を受けさせたいと思うかについて集計すると、子どもに受けさせたい教育段階が「大学またはそれ以上」との回答は、父親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合には87.3%、それ以外の場合には57.2%であった。

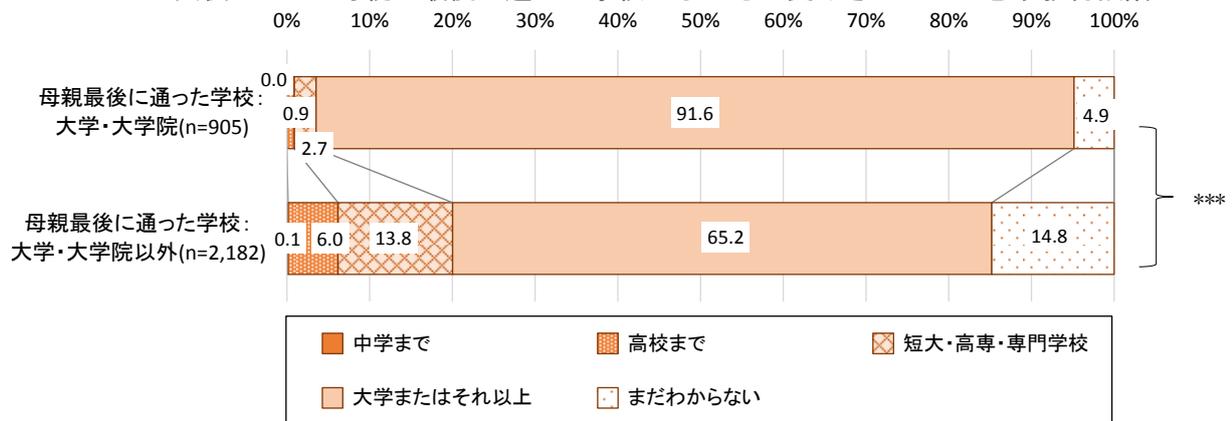
同様に、母親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合とそれ以外の場合とに分類し、子どもにどの段階まで教育を受けさせたいと思うかについて集計すると、子どもに受けさせたい教育段階が「大学またはそれ以上」との回答は、母親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合には91.6%、それ以外の場合には65.2%であった。

さらに、生活困難層に該当するか否かの別に、父親・母親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合とそれ以外の場合とに分類し、子どもにどの段階まで教育を受けさせたいと思うかについて集計すると、非生活困難層・生活困難層ともに、父親・母親が最後に通った学校が「大学」「大学院」である場合には、子どもに受けさせたい教育段階が「大学またはそれ以上」との回答割合が高くなっている。

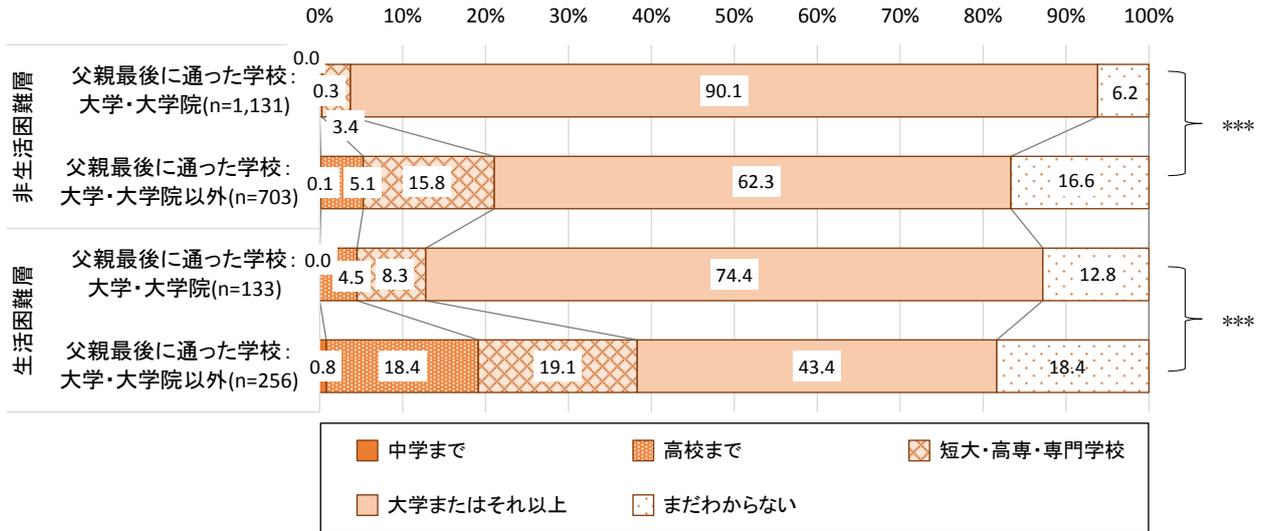
図表 7-1-3 父親が最後に通った学校と子どもに受けさせたいと思う教育段階



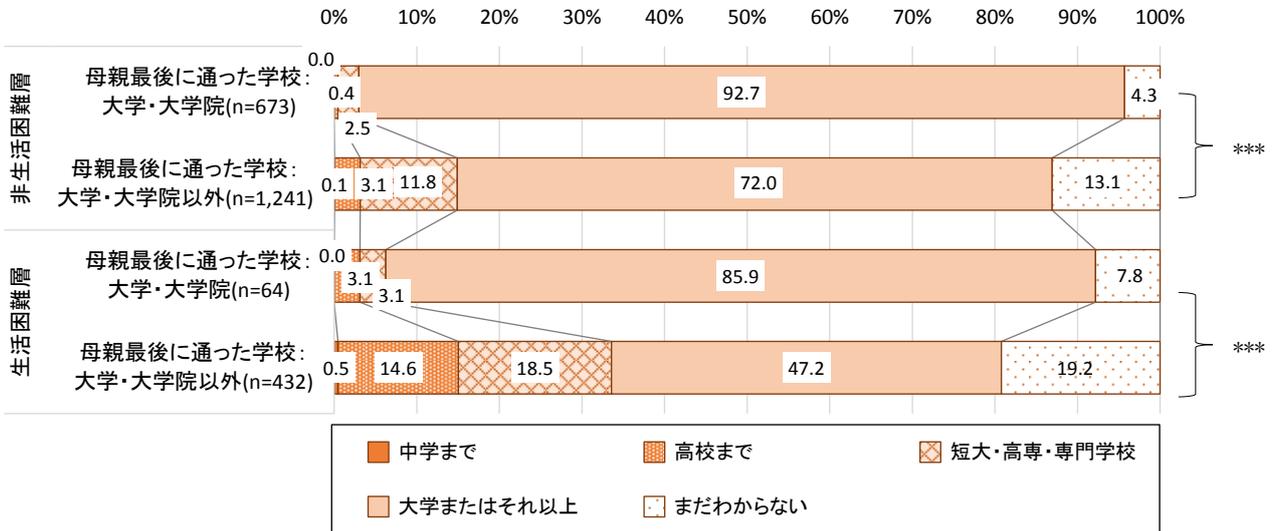
図表 7-1-4 母親が最後に通った学校と子どもに受けさせたいと思う教育段階



図表 7-1-5 生活困難の分類別、父親が最後に通った学校と子どもに受けさせたいと思う教育段階



図表 7-1-6 生活困難の分類別、母親が最後に通った学校と子どもに受けさせたいと思う教育段階



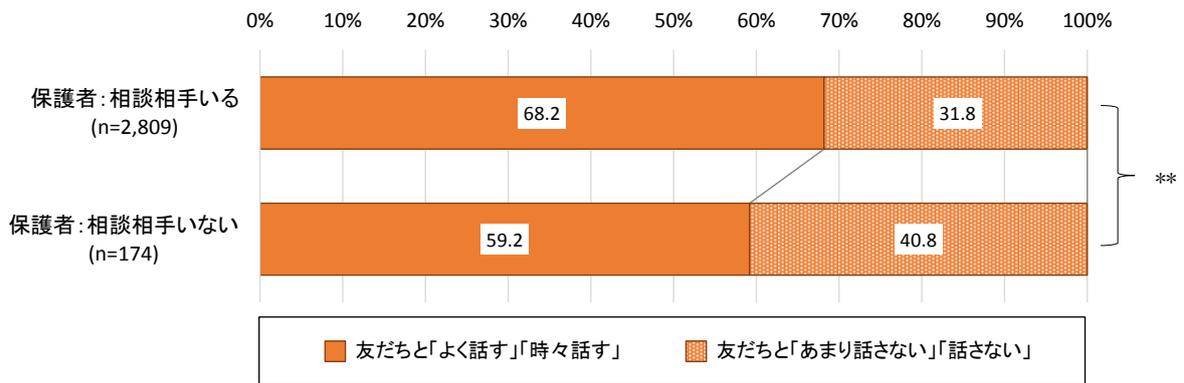
(2) 人間関係・自己肯定感

①保護者の相談相手の有無と子どもの友だちとの会話の状況

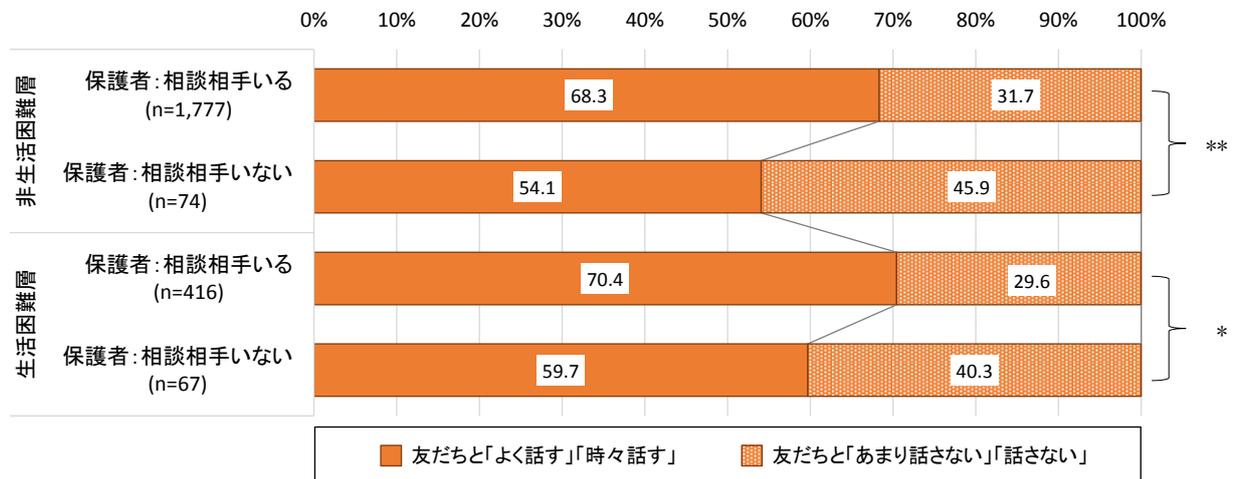
保護者に本当に困ったときや悩みがあるときに相談できる相手がいるか否かと、子どもが困っていることや悩みごと、楽しいことや悲しいことを友だちに話すか否かとの関係について集計すると、子どもが友だちと「よく話す」「時々話す」と回答した割合は、保護者に相談相手がいる場合には68.2%、相談相手がない場合には59.2%であった。

なお、生活困難層に該当するか否かの別に同様の集計を行った場合にも統計的に有意な差が見られ、非生活困難層・生活困難層ともに、子どもが友だちと「よく話す」「時々話す」と回答した割合は、保護者に相談相手がない場合には低くなっている。

図表 7-2-1 保護者の相談相手の有無と子どもの友だちとの会話の状況



図表 7-2-2 生活困難の分類別、保護者の相談相手の有無と子どもの友だちとの会話の状況

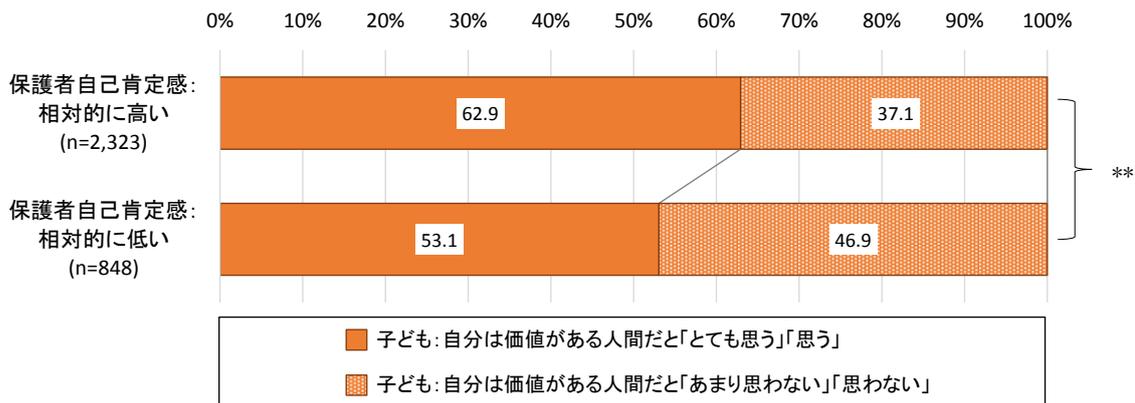


②保護者の自己肯定感と子どもの自己肯定感

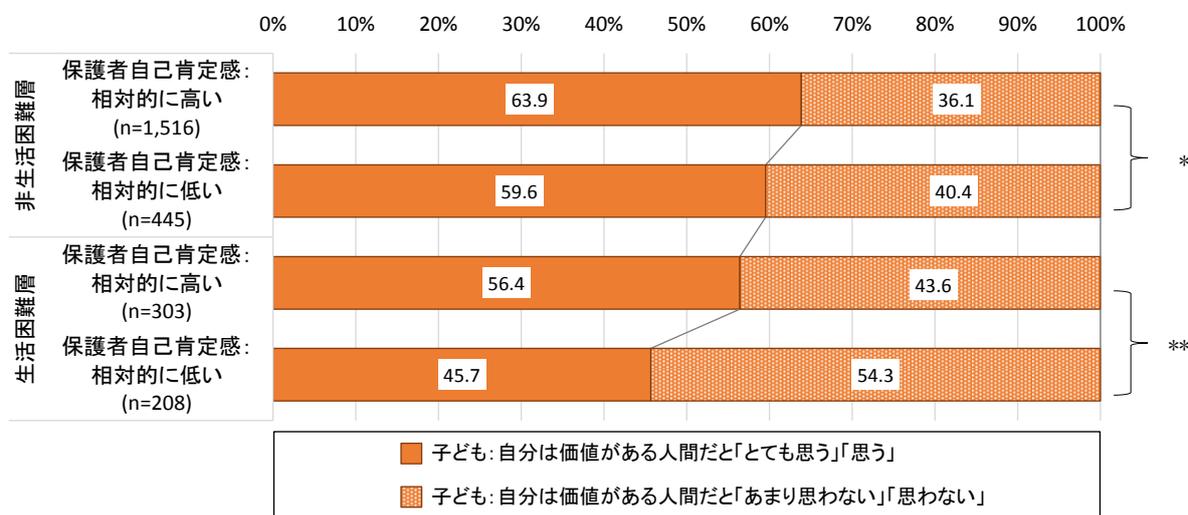
保護者の自己肯定感と子どもの自己肯定感¹²との関係について集計すると、子どもが「自分は価値のある人間だと思う」かについて「とても思う」「思う」と回答した割合は、保護者の自己肯定感が相対的に高い場合には62.9%、保護者の自己肯定感が相対的に低い場合には53.1%であった。

なお、生活困難層に該当するか否かの別に同様の集計を行った場合にも統計的に有意な差が見られ、非生活困難層・生活困難層ともに、保護者の自己肯定感が相対的に低い場合には、子どもが「自分は価値のある人間だと思う」かについて「とても思う」「思う」と回答した割合が低くなっている。

図表 7-2-3 保護者の自己肯定感と子どもの自己肯定感



図表 7-2-4 生活困難の分類別、保護者の自己肯定感と子どもの自己肯定感



¹² 保護者については、過去1か月の間に「自分は価値のない人間だと感じましたか」という設問に対し、「いつも」「たいてい」「ときどき」「少しだけ」と回答した場合を自己肯定感が相対的に低いとし、「全くない」と回答した場合を相対的に高い、とした。

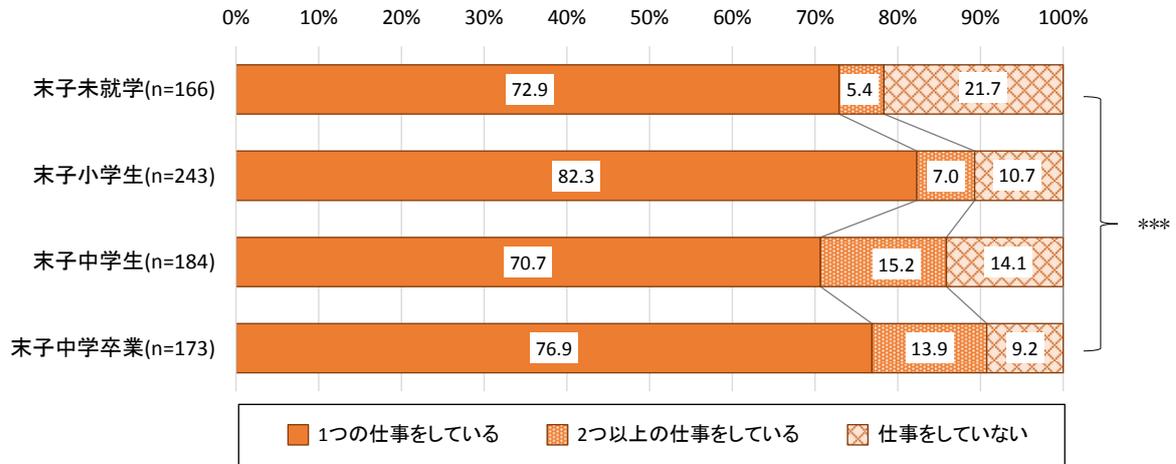
8. ひとり親世帯の状況に関する詳細分析

(1) 末子の年齢・教育段階別の就業の状況・支援ニーズ

児童育成手当を受給しているひとり親世帯の就業の有無を末子の年齢・教育段階別に集計すると、「仕事をしていない」との回答は、末子が未就学の場合には21.7%、小学生の場合には10.7%、中学生の場合には14.1%、中学卒業の場合には9.2%であった。

また、「2つ以上の仕事をしている」との回答は、末子が未就学の場合には5.4%、小学生の場合には7.0%、中学生の場合には15.2%、中学卒業の場合には13.9%であった。

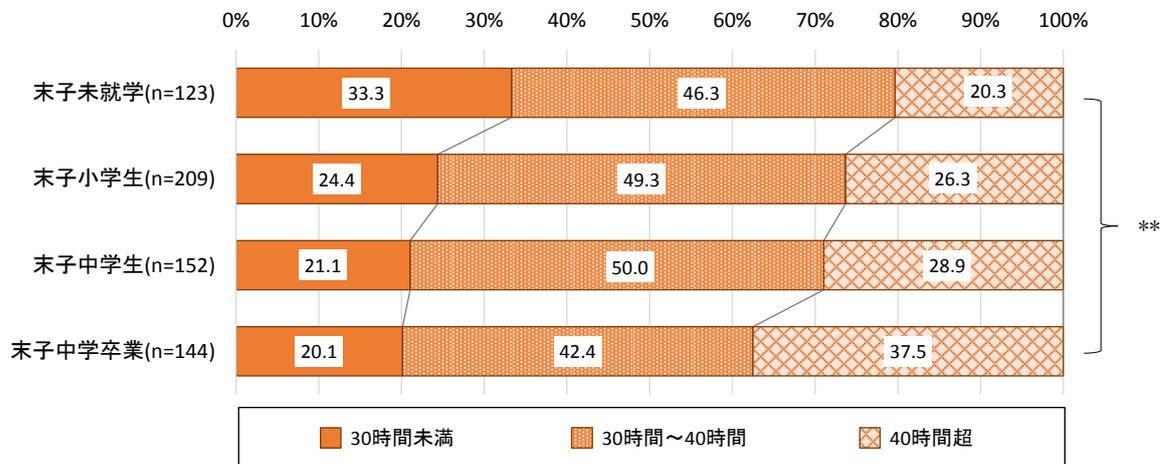
図表 8-1-1 末子の年齢・教育段階別、就業の有無



仕事をしている場合の1週間の平均労働時間を末子の年齢・教育段階別に集計すると、「30時間未満」の割合は、末子が未就学の場合には33.3%、小学生の場合には24.4%、中学生の場合には21.1%、中学卒業の場合には20.1%であった。

他方、「40時間超」の割合は、末子が未就学の場合には20.3%、小学生の場合には26.3%、中学生の場合には28.9%、中学卒業の場合には37.5%であった。

図表 8-1-2 末子の年齢・教育段階別、労働時間（1週間の平均）

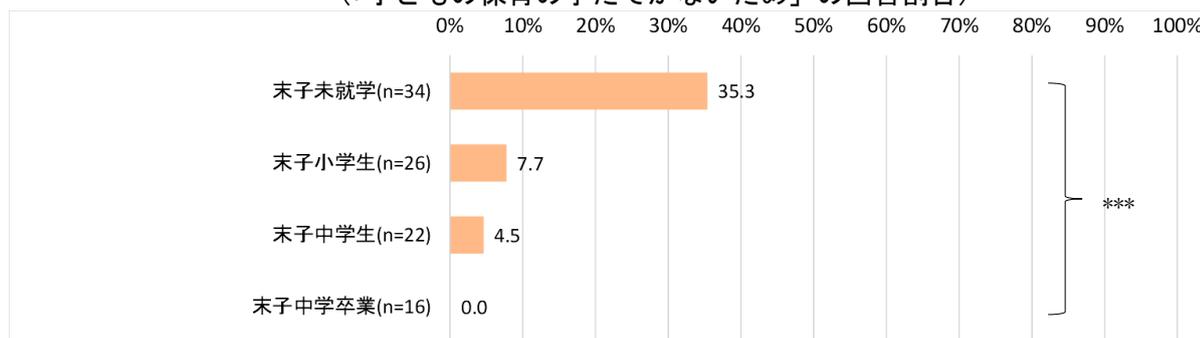


仕事をしていない場合の理由を末子の年齢・教育段階別に集計すると¹³、「子どもの保育の手だてがないため」との回答は、末子が未就学の場合には35.3%、小学生の場合には7.7%、中学生の場合には4.5%、中学卒業の場合には0.0%であった。

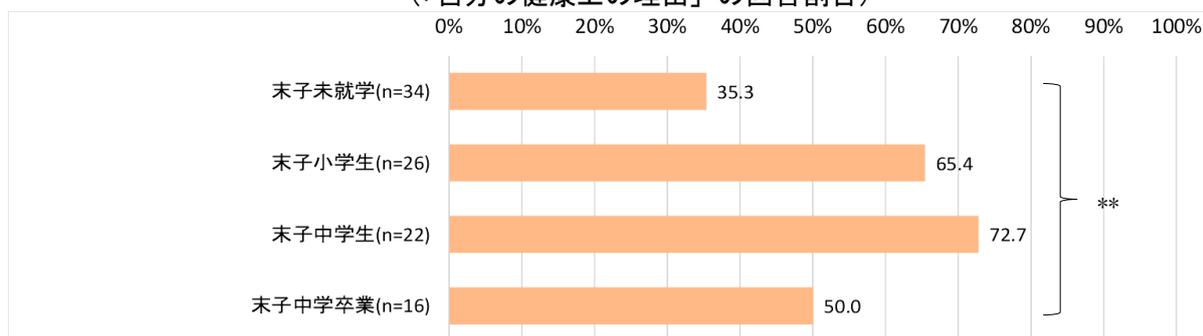
「自分の健康上の理由」との回答は、末子が未就学の場合には35.3%、小学生の場合には65.4%、中学生の場合には72.7%、中学卒業の場合には50.0%であった。

「条件に合う仕事を探している」との回答は、末子が未就学の場合には11.8%、小学生の場合には19.2%、中学生の場合には40.9%、中学卒業の場合には37.5%であった。

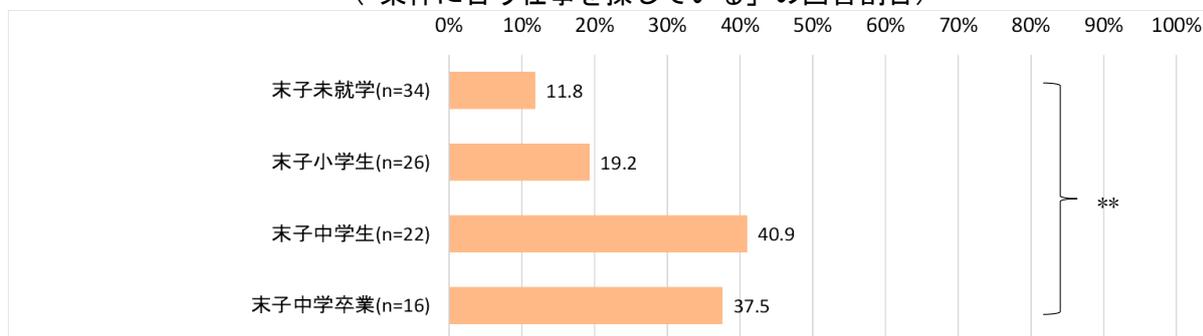
図表 8-1-3 末子の年齢・教育段階別、仕事をしていない理由
 (「子どもの保育の手だてがないため」の回答割合)



図表 8-1-4 末子の年齢・教育段階別、仕事をしていない理由
 (「自分の健康上の理由」の回答割合)



図表 8-1-5 末子の年齢・教育段階別、仕事をしていない理由
 (「条件に合う仕事を探している」の回答割合)



¹³ 集計対象度数が比較的少ない点には留意が必要である。

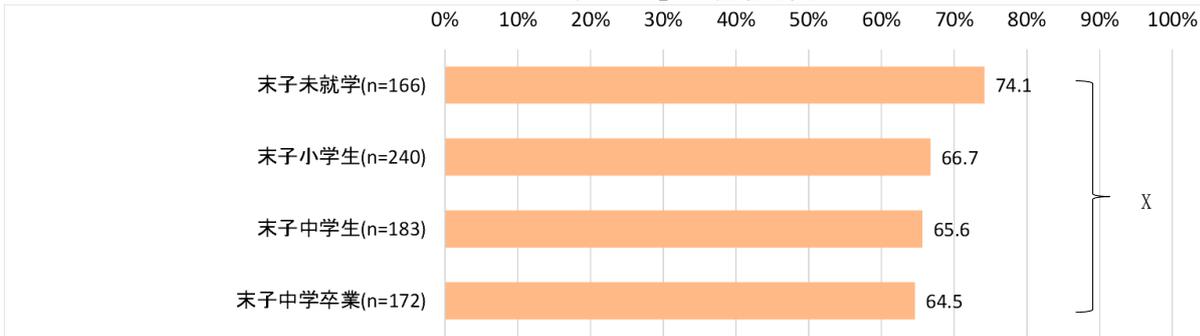
(2) 末子の年齢・教育段階別の悩みごと・生活課題

現在悩んでいることについて末子の年齢・教育段階別に集計すると、「収入が少ない」との回答は、6割～8割で、統計的に有意な差は見られなかった。

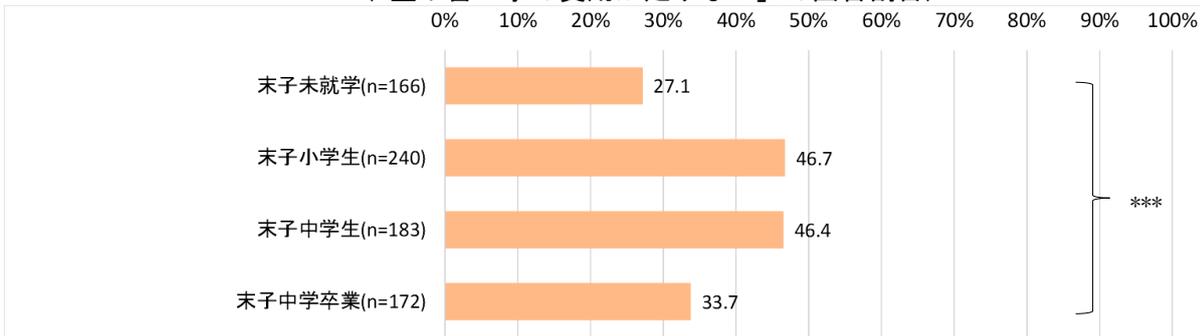
「塾や習い事の費用が足りない」との回答は、末子が未就学の場合には27.1%、小学生の場合には46.7%、中学生の場合には46.4%、中学卒業の場合には33.7%であった。

「子どもの進学」との回答は、末子が未就学の場合には24.7%、小学生の場合には41.7%、中学生の場合には57.4%、中学卒業の場合には52.3%であった。

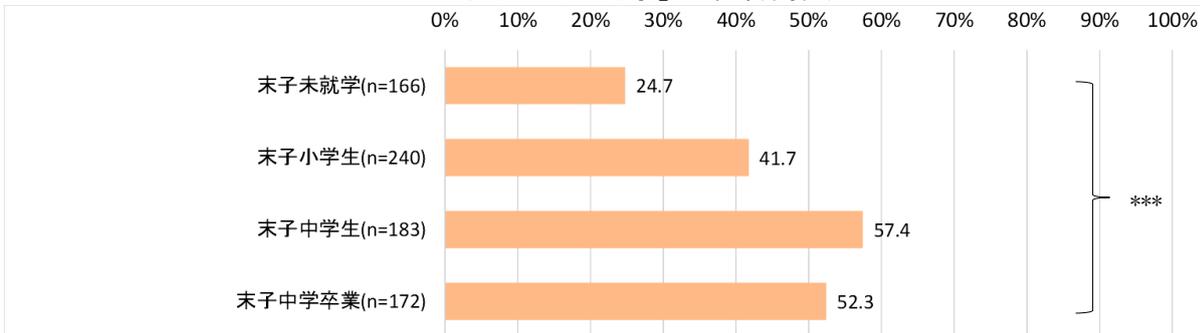
図表 8-2-1 末子の年齢・教育段階別、現在の悩みごと
 (「収入が少ない」の回答割合)



図表 8-2-2 末子の年齢・教育段階別、現在の悩みごと
 (「塾や習い事の費用が足りない」の回答割合)

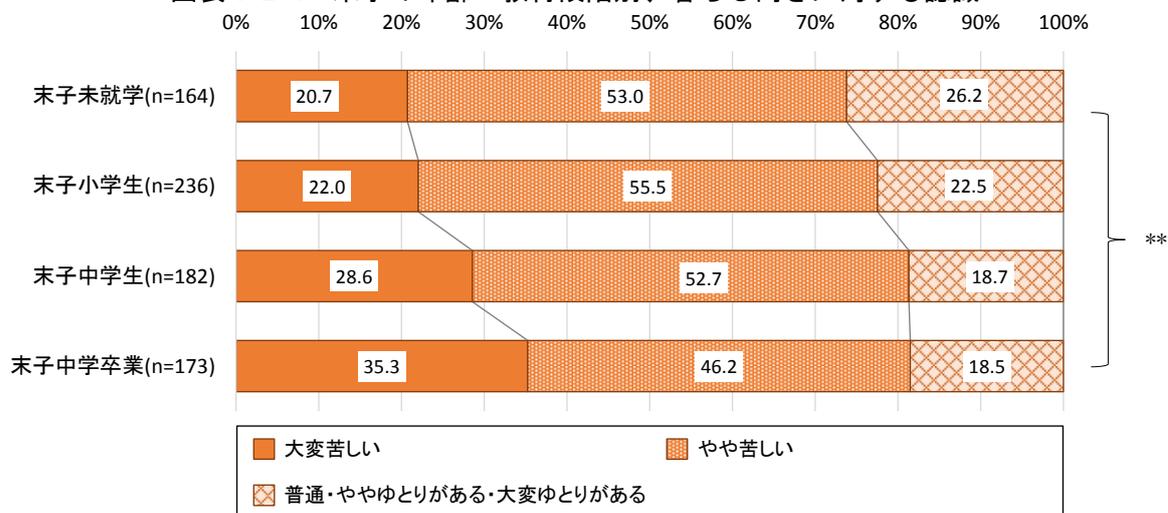


図表 8-2-3 末子の年齢・教育段階別、現在の悩みごと
 (「子どもの進学」の回答割合)



現在の暮らし向きに対する認識について末子の年齢・教育段階別に集計すると、「大変苦しい」との回答は、末子が未就学の場合には20.7%、小学生の場合には22.0%、中学生の場合には28.6%、中学卒業の場合には35.3%であった。

図表 8-2-4 末子の年齢・教育段階別、暮らし向きに対する認識



(3) ひとり親世帯の情報入手経路

①情報の入手先

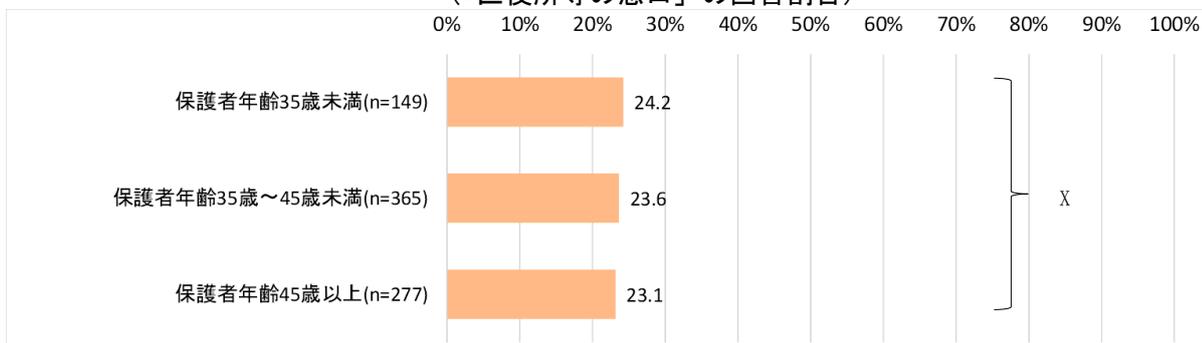
子育てや暮らしに関する情報の入手方法について、保護者の年齢層別に集計すると、入手方法が「区役所等の窓口」との回答は、2~3割で、統計的に有意な差は見られなかった。

「区報」との回答は、保護者の年齢が35歳未満の場合には18.8%、35歳~45歳未満の場合には28.2%、45歳以上の場合には29.2%であった。

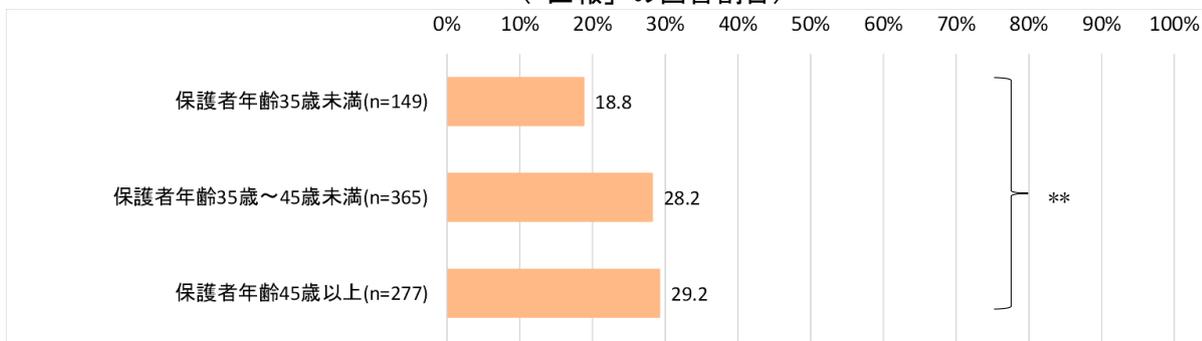
「インターネット（ホームページやブログなど）」との回答は、5~7割で、統計的に有意な差は見られなかった。

「SNS（LINE、ツイッターなど）」との回答は、保護者の年齢が35歳未満の場合には25.5%、35歳~45歳未満の場合には7.4%、45歳以上の場合には6.5%であった。

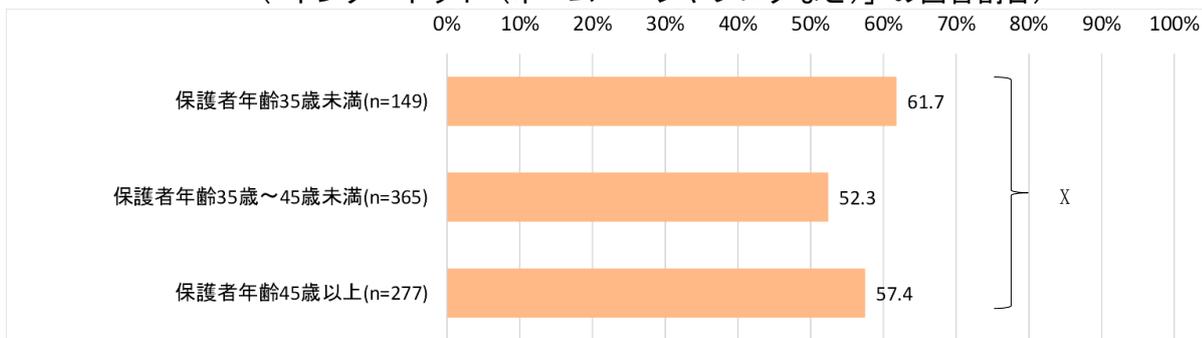
図表 8-3-1 保護者の年齢層別、子育てや暮らしに関する情報の入手方法
 (「区役所等の窓口」の回答割合)



図表 8-3-2 保護者の年齢層別、子育てや暮らしに関する情報の入手方法
 (「区報」の回答割合)



図表 8-3-3 保護者の年齢層別、子育てや暮らしに関する情報の入手方法
 (「インターネット（ホームページやブログなど）」の回答割合)



図表 8-3-4 保護者の年齢層別、子育てや暮らしに関する情報の入手方法
（「SNS（LINE、ツイッターなど）」の回答割合）

